前項ノ疾病ニ罹リ之カ爲退官シタル後重症ニ趨キタルトキハ官吏恩給法第六條ノ規定ニ準シ相當ノ恩給ヲ給ス

第三條　臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リ在官中死去シタルトキ又ハ之カ爲退官シタル後其ノ疾病ノ爲死去シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ官吏遺族扶助法ノ規定ニ依リ其ノ遺族ニ扶助料ヲ給ス

一　第一條ノ在職三箇年未滿ナルトキハ十五箇年在官シタル者ト同視シ其ノ受クヘキ恩給年額ノ三分ノ一

二　第一條ノ在職三箇年以上ナルトキハ其ノ受クヘキ恩給年額ノ三分ノ二

第四條　前二條ノ風土病及流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第五條　本法ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ臺灣ニ在勤スル者ニ關シテハ本法施行前ヨリノ在職年月數ニモ之ヲ適用ス

附　則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○巡査看守退隱料及遺族扶助料法

明治三十四年七月二十五日　法律第三十八號　（改正三八年法二八號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル巡査看守退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡査看守退隱料及遺族扶助料法

第一條　巡査又ハ看守勤續十年以上ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ退隱料ヲ給ス

一　年齡五十歲ヲ超エ退職シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキ

三　廢官廢廳ニ依リ退職シタルトキ

四　身體若ハ精神ノ衰弱又ハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタルトキ

前項ノ退隱料年額ハ退職當時ニ於ケル月俸三箇月分トシ勤續十年以上三十年ニ至ル迄一年ヲ加フル毎ニ退職當時ノ月俸額十分ノ一ヲ增加ス

第二條　巡査又ハ看守勤續一年以上十年未滿ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ一時金ヲ給ス

但シ退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者ハ此ノ限ニ在ラス

一時金ハ退職當時ニ於ケル月俸額ノ三分ノ二ニ勤續年數ヲ乘シタル額トス

第三條　退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ勤續一年以上ニシテ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ前後通算シテ勤續三十年ニ至ル迄後ノ勤續一年ヲ加フル毎ニ後ノ退職當時ニ於ケル月俸額十分ノ一ヲ退隱料年額ニ增加ス

一時金ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者再ヒ前職ニ就キ第一條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ前後通算シテ勤續十年以上ニ至ル者ニハ第一條ニ依リ退隱料ヲ給シ十年未滿ノ者ニハ第二條ニ依リ後ノ勤續年數ニ對スル一時金ヲ給ス

第四條　巡査又ハ看守職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ又ハ之ニ準スヘキ者トヲ爲リ其ノ職ニ堪ヘス退職シタルトキハ退隱料ヲ給ス

前項ノ退隱料年額ハ退職當時ノ月俸三箇月分乃至六箇月分トス

第一條及第三條ニ依リ退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者本條第一項ニ當ルトキハ其ノ退隱料年額ニ退職當時ノ月俸四箇月分以內ヲ增加ス

前二項ニ依ル退隱料年額及增加金額ハ傷痍疾病ノ輕重ニ依リ之ヲ定ム

第五條　前條ノ規定ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以內ニ其ノ傷痍疾病ニ起因シ前條第一項ニ當ルニ至リタル者ニ之ヲ準用ス

第六條　巡査又ハ看守交互ニ轉職シ又ハ他ノ官職ニ轉シタルトキハ事務ノ都合ニ依リ退職ヲ命セラレタル者ト看做ス

第七條　巡査又ハ看守左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ遺族ニ扶助料ヲ給ス

一　職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ在職中死亡シタルトキ

二　勤續十年以上ニシテ在職中死亡シタルトキ

三　退隱料ヲ受ケ又ハ受クヘクシテ死亡シタルトキ

扶助料年額ハ前項第一號ノ場合ニ在リテハ第四條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トシ第二號ノ場合ニ在リテハ第一條又ハ第三條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ一トシ第三號ノ場合ニ在リテハ其ノ退隱料年額ノ三分ノ一トス但シ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退職シタル後一年以內ニ其ノ傷痍疾病ニ起因シテ死亡シタルトキハ第四條第五條ニ依リ査定シタル金額ノ三分ノ二トス

第八條　扶助料ハ寡婦ニ給ス寡婦死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ子ニ給ス

數子間ニ在リテハ法定家督相續ノ順位ニ依リ最先者ニ給ス最先者死亡シ若ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ順次次位者ニ轉給ス

民法第九百六十九條ニ依リ家督相續人タルコトヲ得サル者及推定家督相續人ニシテ廢除セラレタル者ニハ扶助料ヲ給セス但シ疾病其ノ他身體又ハ精神ノ狀況ニ依リ家政ヲ執ルニ堪ヘサルカ爲廢除セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス

養子ハ家督相續人ニ非サレハ扶助料ヲ給セス

第九條　扶助料ヲ受クヘキ寡婦及子ナキトキハ扶助料ハ直系尊屬ニ給ス

前項ノ場合ニ在リテハ先ツ父ニ給シ父死亡シ又ハ扶助料ヲ受クヘカラサルトキハ母ニ給ス母ヨリ祖父ニ祖父ヨリ祖母ニ轉給スルハ順次此ノ例ニ依ル

第十條　扶助料ヲ受クル者ナクシテ死亡シタル者ノ家ニ在ル兄弟姉妹二十歲未滿又ハ篤疾若ハ癈疾ニシテ自活スルコト能ハサルトキハ扶助料ニ相當スル金額ノ三箇年分以內ヲ一時限リ給スルコトアルヘシ

第十一條　退隱料ヲ受ケタル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ之ヲ給セス

一　國籍ヲ喪失シタルトキ

二　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキ

三　在職中ノ犯罪ニ依リ禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキ

第十二條　遺族ニシテ左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ扶助料ヲ給セス

一　前條第一號又ハ第二號ニ當ルトキ

二　寡婦婚姻シタルトキ

三　子年齡二十歲ニ滿チタルトキ

四　尊屬ノ女婚姻シタルトキ

第十三條　子二十歲ニ滿ルモ篤疾又ハ癈疾ニシテ自活スルコト能ハス他ニ扶助料ヲ受クル者ナキトキ

ハ其ノ事由ノ存續スル間扶助料ノ三分ノ一ヲ給スルコトアルヘシ

第十四條　退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間退隱料ノ支給ヲ停止ス

一　公權ヲ停止セラレタルトキ

二　六箇月以上行方不明ナルトキ

退隱料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者再ヒ判任官待遇以上ノ官職ニ就キタル場合ニ於テハ其ノ俸給月額ニ退隱料月割額ヲ合シ退職當時ニ於ケル俸給月額ニ超過スルトキハ其ノ超過額ニ對スル退隱料ノ支給ヲ停止ス

第十五條　扶助料ヲ受クル者又ハ受クヘキ者前條第一項各號ノ一ニ當ルトキハ其ノ間扶助料ノ支給ヲ停止シ第八條第九條ノ順位ニ依リ之ヲ次位者ニ轉給ス

第十六條　退隱料及扶助料ノ年額竝一時金ノ圓位未滿ハ圓位ニ滿タシム

第十七條　巡査又ハ看守ノ勤續年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終ル但シ十二箇月未滿ノ端數ハ之ヲ算入セス

休職及教習中ノ月數ハ勤續年數ニ算入ス

第十八條　巡査又ハ看守其ノ職務ヲ以テ從軍シタルトキハ軍人恩給法ノ算則ニ照ラシテ從軍年ヲ加算ス

第十九條　本法ニ於テ寡婦、子、尊屬ト稱スルハ巡査又ハ看守タリシ者死亡ノ當時ヨリ引續キ其ノ家ニ在ル者ヲ謂フ但シ父死亡後出生シタル嫡出ノ子ハ死亡當時其ノ家ニ在ル者ト看做ス

第二十條　退隱料及扶助料ノ支給、停止及廢止ハ其ノ事由ノ生シタル翌月ヨリ之ヲ行フ

第五條ニ依ル退隱料ノ支給ハ事由認定ノ翌月ヨリ始マリ前條但書ニ依ル扶助料ノ支給ハ出生ノ翌月ヨリ始マル

第二十一條　退隱料、一時金及扶助料ハ之ヲ受クヘキ事由ノ生シタル日ヨリ三年以內ニ請求スルニ非サレハ之ヲ給セス

第二十二條　退隱料ハ民事訴訟法第五百七十條及第六百十八條ノ規定ニ關シテハ恩給ト看做ス

第二十三條　本法ニ依ル給與金ノ支給ニ關スル事項ヲ裁定スヘキ行政官廳ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第二十四條　本法ニ依ル給與金ハ巡査又ハ看守最後ノ退職又ハ死亡當時ニ於テ俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔トス

第二十五條　本法ニ依ル給與金ノ一部又ハ全部ヲ拒否セラレタル者其ノ拒否ヲ不當ナリトスルトキハ訴願ヲ提起スルコトヲ得違法ニシテ權利ヲ傷害セラレタリトスルトキハ行政訴訟ヲ提起スルコトヲ得

第二十六條　本法ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛、女監取締及其ノ遺族ニ之ヲ適用ス（三八年法二八號）

附　則

第二十七條　本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（三四年勅第一四七號ヲ以テ三四年八月一日ヨリ施行）

第二十八條　明治十五年太政官達第四十一號巡査看守給助例ハ巡査、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス但シ巡査看守給助例ニ依リ現ニ給助ヲ受クル者又ハ既ニ受クヘキ事由ノ生シタル者又ハ其ノ事由ニ起因シテ一年以內ニ重症ニ趨キ又ハ死亡シタル者ニ對シテハ其ノ第一條乃至第七條ヲ適用スルノ外本法第三條、第十一條、第十二條、第十四條、第十五條、第二十條第一項、第二十一條、第二十三條及第二十五條ヲ準用ス

明治十五年太政官達第六十六號ハ巡査、看守ニ明治三十三年法律第三十號ハ巡査、看守、陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警守、海軍警査、貴院族守衛、衆議院守衛、女監取締及其ノ遺族ニ之ヲ適用セス（三八年法二八號）

第二十九條（三八年法二八號附則參觀）陸軍會計卒ニシテ陸軍監獄看守ノ職ヲ奉シ引續キ陸軍看守卒ト爲リ尙引續キ陸軍監獄看守ト爲リタル者又ハ陸軍看守卒ヨリ陸軍監獄看守ト爲リタル者ニ付テハ前在職中ノ年月數ヲ陸軍監獄看守ノ在職年月數ニ通算ス但シ軍人恩給法ニ依リ免除恩給ヲ受ケタル者ハ此ノ限ニ在ラス

前項ニ依リ通算シタル會計卒及看守卒ノ在職年月數ハ官吏恩給法ニ依ル在官年數及軍人恩給法ニ依ル服役年數ニハ之ヲ算入セス

○巡査看守退隱料及遺族扶助料法施行令

明治三十四年七月二十五日勅令第百四十八號（改正四〇年勅一九〇號）

朕巡査看守退隱料及遺族扶助料法施行令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

巡査看守退隱料及遺族扶助料法施行令

第一條　巡査看守退隱料及遺族扶助料法第四條第二項ノ退隱料年額及同條第三項ノ增加金額ノ等差ハ左ノ如シ

	退隱料年額	增加金額
第一	兩眼ヲ盲シ若ハ二肢以上ヲ亡シタルトキ	六箇月分
第二	前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	五箇月半分
第三	一肢ヲ亡シ若ハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	五箇月分
第四	前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	四箇月半分
第五	一眼ヲ盲シ若ハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ	四箇月分
第六	前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リタルトキ	三箇月半分
	傷痍疾病ノ等差ハ文官傷痍疾病等差例ニ依ル	三箇月分

第二條　巡査看守退隱料及遺族扶助料法第二十三條ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ內閣恩給局長、其ノ他ニ在リテハ地方長官（東京府ニ在リテハ警視總監）トス

臺灣ニ於テハ前項ノ行政官廳ハ國庫ヨリ給與金ヲ支給スヘキ者ニ在リテハ臺灣總督其ノ他ニ在リテハ【知事及】廳長トス

第一項ノ行政官廳ハ統監府所屬ノ者ニ在リテハ統監、關東都督府所屬ノ者ニ在リテハ關東都督、樺太廳所屬ノ者ニ在リテハ樺太廳長官トス（四〇年勅一九〇號）

附則

本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○內閣恩給局長ノ管掌ニ屬スル巡査看守退隱料及遺族扶助料取扱規程

明治三十四年八月一日閣令第一號（改正四一年閣七號）

巡査看守退隠料及遺族扶助料法施行令ニ依リ内閣恩給局長ノ管掌ニ屬スル巡査看守退隠料及遺族扶助料取扱規程左ノ通之ヲ定ム

第一條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法ニ依リ退隠料又ハ一時金ヲ受クヘキ者ハ退職當時ノ本屬廳ノ長官ニ請求スヘシ但シ廢官廢廳ニ當リタルトキハ其ノ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ノ長官ニ請求スヘシ

第二條　前條ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　在職履歴書

二　戸籍謄本

但シ一時金請求書ニハ戸籍謄本ノ添付ヲ要セス

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第一項及第四條第三項ニ依ル退隠料年額増加ノ請求書ニハ前項書類ノ外前ニ受ケタル退隠料證書ヲ添付スヘシ

第三條　職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退隠料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其ノ事實ヲ證明スヘシ

一　傷痍又ハ疾病ノ職務ニ起因シタル事實ヲ認ムヘキ證據書類

二　醫師ノ診斷書

第四條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ヲ受クヘキ遺族ハ戸籍謄本及第五條乃至第十一條ノ書類ヲ添付シ住所地ノ地方長官ニ請求スヘシ

第五條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法第七條第一項第一號又ハ第二號ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ヨリ死亡者ノ履歴書ヲ其ノ遺族ニ下付スヘシ同條第一項第三號末段又ハ同條第二項但書ニ當ル者ノ遺族ノ請求アルトキ亦同シ

第六條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法第七條第一項第一號又ハ同條第二項但書ニ當ル者アリタルトキハ本屬廳ニ於テ事實ヲ査覈シ其ノ傷痍又ハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據トナルヘキ書類及醫師ノ診察ヲ爲サシメタル場合ニ於テハ其ノ診斷書ヲ併セテ其ノ遺族ニ下付スヘシ

第七條　退隠料ヲ受ケタル後死亡シタル者ノ遺族ニシテ扶助料ヲ請求スルモノハ死亡者ノ受ケタル退隠料證書ヲ添付スヘシ

第八條　扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利消滅シタルトキ其ノ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ前者ノ扶助料證書ヲ添付スヘシ

第九條　重罪ノ刑ニ處セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ヲ證明スヘキ確定裁判ノ謄本ヲ添付スヘシ

第十條　六箇月以上行方不明トナリタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ニ關スル市町村長ノ證明書ヲ添付スヘシ

第十一條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法第十條又ハ第十三條ニ當リ扶助料ヲ請求スル者ハ自活スルコト能ハサル事實ニ付テハ市町村長ノ證明書、篤疾又ハ癈疾ニ付テハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第十二條　退隠料又ハ一時金ノ請求ヲ受ケタル各廳長官ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ請求者ノ在職年數及退隠料年額又ハ一時金計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

扶助料ノ請求ヲ受ケタル地方長官ハ査覈ノ上扶助料年額ノ計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ内閣恩給局長ニ差出スヘシ

第十三條　内閣恩給局ニ於テ退隠料、扶助料又ハ一時金ノ支給ヲ許可シタルトキハ證書ヲ作リ本人住

所地ノ地方廳ヲ經テ之ヲ下付スヘシ但シ退隱料又ハ一時金ノ證書ヲ下付スルトキハ先ツ第一條ニ依リ請求ヲ爲シタル官廳ヲ經由スヘシ

前項ノ證書ヲ下付シタルトキハ內閣恩給局ハ其ノ旨ヲ支給主管省ニ通知スヘシ

第十四條　退隱料及扶助料ハ其ノ年額ヲ四分シ四月、七月、十月、一月ニ於テ其ノ前三箇月分ヲ支給ス但シ退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利ノ消滅若ハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第十五條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者重罪若クハ禁錮ノ刑ニ處セラレ又ハ刑ノ執行猶豫ノ言渡ヲ受ケ若クハ之ヲ取消サレタルトキハ其ノ確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ支給廳ニ通知スヘシ（四一年閣七號）

第十六條　巡査看守退隱料及遺族扶助料法第十四條第二項ニ當ル者アルトキハ其ノ任用シタル官廳ヨリ支給廳ニ通知スヘシ爾後其ノ俸給額ニ異動アルトキ及解任シタルトキ亦同シ但シ該通知書ニハ俸給額及其ノ支給ヲ始ムル日（解任ノトキハ支給ヲ終リタル日）ヲ付記スヘシ（同上）

第十七條　支給廳ニ於テ前二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ內閣恩給局及支給主管省ニ通知スヘシ（同上）

第十八條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ若クハ權利消滅シタルトキハ其ノ遺族又ハ本人ヨリ之ヲ支給廳ニ屆出ヘシ

第十九條　支給廳ニ於テ退隱料又ハ扶助料ノ支給ヲ廢止シ若クハ停止シタルトキハ其ノ事由ヲ具シ之ヲ支給主管省及內閣恩給局ニ通知スヘシ但シ支給主管省ヨリ權利ノ消滅若クハ停止ニ關シ通知ヲ受ケタルモノハ此ノ限ニ在ラス

第二十條　退隱料又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ住所地ノ地方廳ニ屆出ヘシ

地方廳ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ其ノ事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ內閣恩給局ニ申出ヘシ此ノ場合ニ於テ恩給局ハ證書ノ謄本ヲ作リ地方廳ヲ經テ本人ニ下付スヘシ

前項證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ效力アルモノトス

第二十一條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ第十三條ノ證書ヲ添ヘ住所地ノ地方廳ニ屆出ヘシ

地方廳ハ證書ノ裏面ニ其ノ事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上本人ニ下付シ其ノ旨ヲ內閣恩給局及支給主管省ニ通知スヘシ

附　則

第二十二條　巡査看守給助例ニ依リ退職給助、傷痍給助又ハ死亡給助ヲ受クル者若ハ受クヘキ者ハ其ノ給與ノ種類ニ從ヒ退隱料、一時金又ハ扶助料ヲ受クル者若クハ受クヘキ者ニ準シ第十四條ヲ除クノ外本令ノ規定ヲ準用ス

第二十三條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本令ニ於テ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ戶長又ハ之ニ準スヘキ者ニ於テ之ヲ行フヘシ

第二十四條　本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○地方長官主管ニ屬スル巡査看守退隱料及遺族扶助料取扱規程

明治三十四年七月三十一日
內務省令第二十二號

巡査看守退隠料及遺族扶助料法施行令ニ依リ地方長官主管ニ屬スル退隠料及遺族扶助料取扱規程左ノ通之ヲ定ム

第一條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法ニ依リ退隠料又ハ一時金ヲ受クヘキ者ハ退職當時ノ本屬廳府縣長官ニ請求スヘシ

第二條　前條ノ請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　在職履歴書

二　戸籍謄本

但シ一時金請求書ニハ戸籍謄本ノ添付ヲ要セス

巡査看守退隠料及遺族扶助料法第三條第一項及第四條第三項ニ依ル退隠料年額增加ノ請求書ニハ前項書類ノ外前ニ受ケタル退隠料證書ヲ添付スヘシ

第三條　職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ退隠料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外左ノ書類ヲ以テ其ノ事實ヲ證明スヘシ

一　傷痍又ハ疾病ノ職務ニ起因シタル事實ヲ認ムヘキ證據書類

二　醫師ノ診斷書

第四條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ヲ受クヘキ遺族ハ戸籍謄本及第五條乃至第九條ノ書類ヲ添付シ巡査タリシ者ノ最終ノ本屬廳府縣長官ニ請求スヘシ

第五條　退隠料ヲ受ケタル後死亡シタル者ノ遺族ニシテ扶助料ヲ請求スルモノハ死者ノ受ケタル退隠料證書ヲ添付スヘシ

第六條　扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利消滅シタルトキ其ノ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ前者ノ扶助料證書ヲ添付スヘシ

第七條　重罪ノ刑ニ處セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ヲ證明スヘキ確定裁判ノ謄本ヲ添付スヘシ

第八條　六箇月以上行方不明トナリタルニ因リ扶助料ノ轉給ヲ請求スル者ハ其ノ事實ニ關スル市町村長ノ證明書ヲ添付スヘシ

第九條　巡査看守退隠料及遺族扶助料法第十條若ハ第十三條ニ當リ扶助料ヲ請求スル者ハ自活スルコト能ハサル事實ニ付テハ市町村長ノ證明書、篤疾癈疾ニ付テハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第十條　廳府縣長官ニ於テ退隠料扶助料若ハ一時金ノ支給ヲ許可シタルトキハ證書ヲ作リ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十一條　退隠料及扶助料ハ其ノ年額ヲ四分シ四月、七月、十月、一月ニ於テ其ノ前三箇月分ヲ支給ス但シ退隠料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ又ハ權利消滅シ若ハ停止ノトキ及一時支給ノ金額ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第十二條　退隠料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ若ハ權利消滅シタルトキハ其ノ遺族又ハ本人ヨリ之ヲ給與ヲ行フ廳府縣長官ニ屆出ヘシ

第十三條　退隠料又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ給與ヲ行フ廳府縣長官ニ屆出ヘシ

前項ノ屆出ヲ受ケタル廳府縣長官ハ證書ノ謄本ヲ作リ之ヲ本人ニ下付スヘシ

前項證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ效力アルモノトス

第十四條　退隠料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ第十條ノ證書ヲ添ヘ給與ヲ行フ廳府縣長官ニ屆出ヘシ

前項ノ届出ヲ受ケタル廳府縣長官ハ證書ノ裏面ニ其ノ事實ヲ記載シ長官署名捺印ノ上之ヲ本人ニ下付スヘシ

附則

第十五條　本規程ニ於テ廳府縣長官ニ屬スル事務ハ廢官廢廳ノ場合ニ在テハ事務ノ引繼ヲ受ケタル官廳ニ移ルモノトス

第十六條　巡査看守給助例ニ依リ退職給助、傷痍給助又ハ死亡給助ヲ受クル者若クハ受クヘキ者ハ其ノ給與ノ種類ニ從ヒ退隱料一時金又ハ扶助料ヲ受クル者若クハ受クヘキ者ニ準シ第十一條ヲ除クノ外本令ノ規程ヲ準用ス

第十七條　市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ本令ニ於テ市町村長ノ爲スヘキ職務ハ戶長又ハ之ニ準スヘキ者ニ於テ之ヲ行フ

第十八條　本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○巡査看守退隱料及遺族扶助料法ニ依ル給與金ニシテ國庫ノ負擔ニ屬スルモノノ支給ニ關スル件

明治三十八年三月二十七日　大藏省令第十六號

巡査看守退隱料及遺族扶助料法ニ依ル給與金ニシテ國庫ノ負擔ニ屬スルモノノ支給ニ關スル件左ノ通之ヲ定ム

第一條　巡査看守退隱料及遺族扶助料法ニ依ル給與金ニシテ國庫ノ負擔ニ屬スルモノハ明治三十八年度分ヨリ大藏省所管ノ經費ヲ以テ退隱料扶助料又ハ一時金ヲ受クル者ノ住所地ノ地方廳ヲ經テ之ヲ支給ス

第二條　巡査看守退隱料及遺族扶助料法實施ノ後巡査看守給助例ニ依リ內閣恩給局長又ハ臺灣總督ノ發シタル給助金ノ證書ニ對シテハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ支給ス但シ權利消滅若クハ停止ノトキハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第三條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者住所地ヲ轉シタルトキハ官吏恩給法施行規則第九條ノ例ニ依ル

○臺灣ニ在勤スル巡査看守陸軍監獄看守陸軍警守女監取締退隱料及遺族扶助料ニ關スル法

明治三十五年三月二十四日　法律第二十九號（改正三八年法二九號　三九年法五號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣ニ在勤スル巡査看守退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　臺灣ニ在勤スル巡査看守陸軍監獄看守陸軍警守及女監取締ニシテ二箇年以上引續キ在職シタル者ニハ巡査看守退隱料及遺族扶助料法ノ勤續年數計算ニ於テ其ノ在職一箇月ニ對シ半箇月ヲ加算ス但シ從軍年ノ加算アル場合ハ此ノ限ニ在ラス（三十九年法五號附則參觀）

前項ノ加算ハ臺灣ニ到著シタル日ニ始マル

第二條　臺灣ニ在勤スル巡査看守陸軍監獄看守陸軍警守及女監取締ニシテ二箇年以上引續キ在職シタ

ル者臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リタルトキハ退隠料給與上職務ノ爲疾病ニ罹リタルモノト看做ス

第三條　臺灣ニ在勤スル巡査看守陸軍監獄看守及女監取締ニシテ臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リタルトキハ遺族扶助料給與上職務ノ爲疾病ニ罹リタルモノト看做ス

第四條　前條ノ風土病及流行病ノ種類ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第五條　本法ノ規定ハ本法施行ノ際現ニ臺灣ニ在勤スル者ニ關シテハ本法施行前ヨリノ在職年月數ニモ之ヲ適用ス

附則

本法ハ明治三十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○統監府關東都督府及樺太等在勤巡査看守及女監取締ノ退隠料及遺族扶助料ニ關スル法

明治四十年五月十四日　法律第四十九號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル統監府、關東都督府及樺太等在勤巡査、看守及女監取締ノ退隠料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十五年法律第二十九號第一條ノ規定ハ別ニ勅令ヲ以テ定ムルモノヲ除クノ外統監府及關東都督府並其ノ所屬官署ニ在勤スル巡査、看守及女監取締ニ之ヲ準用ス樺太ニ在勤スル者ニ付亦同シ

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法ノ規定ハ統監府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治三十九年二月以降、關東都督府及其ノ所屬官署ニ在勤スル者ニ關シテハ明治三十九年九月以降ノ在職月數ニモ之ヲ適用ス

○四十年法律第四十九號ヲ適用セサル巡査看守及女監取締ニ關スル件

明治四十年五月十四日　勅令第百八十九號

朕明治四十年法律第四十九號ヲ適用セサル巡査、看守及女監取締ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治四十年法律第四十九號ハ政府ヨリ俸給ノ支給ヲ受ケサル巡査、看守及女監取締ニ之ヲ適用セス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○市町村立小學校教員退隠料及遺族扶助料法

明治二十三年十月二日（改正三二年法八九號、四〇年法四七號）
法律第九十號

朕市町村立小學校教員退隠料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

市町村立小學校教員退隠料及遺族扶助料法

第一條　市町村立小學校ノ正教員ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條　在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一　年齡六十歲ヲ超エ退職ヲ命シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三　廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編制ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ

第三條　左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加退隱料ヲ給ス

一　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

二　職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第四條（四〇年法四七號）　退隱料ノ年額ハ退職現時ノ俸給ト在職年數トニ從ヒ別表ニ依リ之ヲ定ム但シ在職四十年以上ノ者ニ給スヘキ退隱料ハ四十年ノ額トス

前項ニ依リ退隱料年額ヲ定ムルハ十五年以上官立公立小學校ニ勤續シタル者ニ退隱料ヲ支給スル場合ニ限ル其ノ他ノ場合ニ於テハ官吏恩給法第五條ヲ準用ス

退隱料ヲ受クル者前ニ退職給與金ヲ受ケタルトキハ最初ノ十年間其ノ退職給與金ノ十分ノ一ニ相當スル金額ヲ退隱料年額ヨリ控除ス

兼職ニ依リテ受クル加俸ハ退隱料年額ヲ算定スルニ當リ之ヲ除算スヘシ

第四條ノ二（同上）　退隱料ヲ受クル者公立學校職員、公立圖書館職員、小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル公立幼稚園ノ保姆、在外指定學校職員又ハ教育事務ニ從事スル文官ト爲リタル後滿一年以上ニシテ退職又ハ退官シタルトキハ前後ノ在職在官年數ヲ通算シ後職又ハ後官ニ對スル退隱料ト前ノ退隱料トヲ比較シ其ノ額多キ方ヲ給ス

前項ノ場合ニ於テ本法ニ依ル退隱料額カ府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法、明治二十九年法律第十三號又ハ在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料ニ依ル退隱料額ニ比較シ多キトキハ其ノ退隱料ハ本法ニ依リ之ヲ支給スルモノトス

第四條ノ三（同上）　官吏恩給法第六條、第十條、第十二條第二項及第十三條第二項ハ退隱料ニ之ヲ準用ス」

退隱料等ノ支給上在職年數ノ算定ニ關スル規程ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條　退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其間退隱料ノ支給ヲ停止ス但シ第一號ノ場合ニ於テハ其ノ差額ニ限リ支給ヲ停止ス（四〇年法四七號）

一　公務ニ就キ受クル給料ト退隱料トヲ合シタル金額退職現時ノ給料額ヲ超過スルトキ（同上）

二　五箇年以上受領ヲ怠リタルトキ

三　公權ヲ停止セラレタルトキ

第六條　年齡未タ六十歲ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第七條　市町村立小學校ノ準教員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第三條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ給料四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第八條（三二年法八九號）　在職滿一年以上ニシテ退職シタル市町村立小學校正教員ニハ退職現時ノ給料半箇月分ヲ以テ在職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金員ヲ一時給與ス但休職滿期ニ依リ退職シタル者

ハ其本職最終ノ給料額ニ依リ之ヲ給與ス

市町村立小學校正教員ニシテ教育事務ニ從事スル文官又ハ他ノ待遇文官ニ轉任シタル者退官又ハ退職シタルトキハ小學校教員ノ在職年數ニ應シ前項ノ給與金ヲ給ス（四〇年法四七號）

第二條若ハ第三條ニ依リ退隱料ヲ受クル者、他ノ法律ニ依リ退隱料若ハ恩給ヲ受クル者、自己ノ便宜ニ依リ退職退官シタル者又ハ免職ニ處セラレ、懲戒處分若ハ刑事裁判ニ依リ免官セラレ若ハ失職ニ該當シタル者ハ前二項ノ限ニ在ラス（同上）

本條ノ退職給與金ヲ受ケタル者市町村立小學校正教員ニ再任シ爾後退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ再任ノ日ヨリ之ヲ起算ス（同上）

第九條　退隱料ノ支給及第八條ノ給與ハ府縣知事之ヲ裁定ス（同上）

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十條　市町村立小學校正教員左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

一　在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二　在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三　退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十一條　官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス（三八年法八九號）

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍內ニ在ル二十歲未滿又ハ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹

アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十二條　在職十五年未滿ノ市町村立小學校正教員在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス

前項ノ扶助金ハ退職給與金ノ額ト同額トス（三二年法八九號四〇年法四七號）

第十三條　扶助料及扶助金ノ支給竝第十一條第二項ノ給與ハ市町村長ノ申牒ニ依リ府縣知事之ヲ裁定ス（三二年法八九號）

第十四條　府縣ハ小學校教員恩給基金ヲ備フヘキモノトス

市町村ハ其市町村立小學校ニ在職スル正教員ノ給料額百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年其府縣ニ納ムヘキモノトス

兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス（同上）

本條第二項ノ納金ハ府縣小學校教員恩給基金ト爲スヘシ（同上）

恩給基金ハ其利子ヲ以テ退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ニ充ツルノ外之ヲ支消スルコトヲ得サルモノトス

本條第二項ニ依リ各府縣ニ於テ收入シタル納金額二分ノ一ニ當ル金員ヲ收入年度ノ翌々年度毎ニ國庫ヨリ府縣ニ給與スルモノトス（同上）

退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ハ恩給基金ノ利子及國庫ノ給與金其他ノ收入ヲ以テ之ヲ支辨シ不足アルトキハ府縣費ヲ以テ之ヲ補充スヘキモノトス

恩給基金ノ管理竝退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

恩給基金ノ管理竝退隱料扶助料扶助金第八條及第十一條第二項ノ給與ノ支給等ニ關スル費用ハ總テ府縣ノ負擔トス

第十五條　此法律中第一條乃至第十三條ハ明治二十六年度ヨリ第十四條ハ明治二十五年度ヨリ之ヲ施行ス

第十六條　府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

（別表）（四〇年法四七號）（四十年法律四十七號附則參觀）

市町村立小學校教員退隱料表

在職年數 / 給料	七十五圓以上百圓以下	六十五圓以上七十五圓未滿	六十圓以上六十五圓未滿	五十五圓以上六十圓未滿	五十圓以上五十五圓未滿	四十五圓以上五十圓未滿	四十圓以上四十五圓未滿	三十五圓以上四十圓未滿	三十圓以上三十五圓未滿	二十五圓以上三十圓未滿	二十圓以上二十五圓未滿	十五圓以上二十圓未滿	十五圓未滿
十五年	二二五	一九五	一八〇	一六五	一五〇	一三五	一二〇	一〇八	九六	八四	七二	六〇	四八
十六年	二三三	二〇二	一八六	一七一	一五五	一四〇	一二四	一一二	九九	八七	七五	六二	五〇
十七年	二四〇	二〇八	一九二	一七六	一六〇	一四四	一二八	一一六	一〇二	九〇	七七	六四	五二
十八年	二四八	二一五	一九八	一八二	一六五	一四九	一三二	一二〇	一〇五	九三	八〇	六六	五三
十九年	二五五	二二一	二〇四	一八七	一七〇	一五三	一三六	一二四	一〇八	九五	八二	六八	五五
二十年	二六三	二二八	二一〇	一九三	一七五	一五八	一四〇	一二九	一一一	九九	八四	七〇	五六
二十一年	二七四	二三八	二一九	二〇一	一八三	一六五	一四六	一三四	一一六	一〇三	八八	七三	五九
二十二年	二八五	二四七	二二八	二〇九	一九〇	一七二	一五二	一三九	一二二	一〇七	九二	七六	六一
二十三年	二九七	二五七	二三七	二一八	一九八	一七八	一五八	一四四	一二六	一一一	九五	七九	六四
二十四年	三〇八	二六七	二四六	二二六	二〇五	一八五	一六四	一四九	一三一	一一五	九九	八二	六六
二十五年	三一九	二七七	二五五	二三四	二一三	一九二	一七〇	一五六	一三六	一一九	一〇二	八五	六八
二十六年	三三四	二九〇	二六七	二四五	二二三	二〇一	一七八	一五六	一三六	一一九	一〇二	八五	六八
二十七年	三四九	三〇三	二七九	二五六	二三三	二一〇	一八六	一七〇	一四八	一二九	一一二	九三	七五
二十八年	三六四	三一六	二九一	二六七	二四三	二一九	一九四	一七七	一五四	一三四	一一七	九七	七八
二十九年	三七九	三二九	三〇三	二七八	二五三	二二八	二〇二	一八四	一六〇	一四〇	一二二	一〇一	八一
三十年	三九四	三四二	三一五	二八九	二六三	二三七	二一〇	一九三	一六六	一四五	一二六	一〇五	八四
三十一年	四一三	三五八	三三〇	三〇三	二七五	二四八	二二〇	二〇二	一七四	一五二	一三二	一一〇	八八
三十二年	四三二	三七四	三四五	三一七	二八八	二五九	二三〇	二一一	一八二	一五八	一三八	一一五	九二
三十三年	四五〇	三九〇	三六〇	三三〇	三〇〇	二七〇	二四〇	二一〇	一九〇	一六六	一四四	一二〇	九六
三十四年	四六九	四〇七	三七五	三四四	三一三	二八二	二五〇	二二八	一九八	一七三	一五〇	一二五	一〇〇
三十五年	四八八	四二三	三九〇	三五八	三二五	二九三	二六〇	二三七	二〇六	一八〇	一五六	一三〇	一〇四
三十六年	五一〇	四四二	四〇八	三七四	三四〇	三〇六	二七二	二四八	二一五	一八八	一六四	一三六	一〇九
三十七年	五三三	四六二	四二六	三九一	三五五	三二〇	二八四	二五九	二二四	一九六	一七二	一四二	一一四
三十八年	五五五	四八一	四四四	四〇七	三七〇	三三三	二九六	二七〇	二三三	二〇四	一七八	一四八	一一九
三十九年	五七八	五〇一	四六二	四二四	三八五	三四七	三〇八	二八一	二四二	二一二	一八五	一五四	一二四

四十年	六〇〇	五二〇	四八〇	四四〇	四〇〇	三六〇	三二〇	二九二	二五二	二二〇	一九二	一六〇	一二八

○市町村立小學校教員退隱料等ノ支給ニ關スル在職年數算定方

明治二十五年二月八日（改正三二年勅令第一九七號）勅令第十八號

朕市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數算定ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　市町村立小學校教員退隱料等ノ支給上ニ關スル正教員ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

第二條　左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ニ算入スヘシ

一　市町村立小學校正教員休職中ノ年數及月數

二　明治十四年六月以後市町村立小學校訓導ノ職ニ在リタル年數及月數

第三條　左ニ掲クル年數及月數ハ正教員在職年數ヨリ除算スヘシ

一（三二年勅令一九七號）

二　自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者再就職シタルトキハ其ノ前在職ノ年數及月數（同上）

三（同上）

四　恩給若クハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ市町村立小學校正教員ヲ兼ヌルトキハ其兼職中ノ年數及月數

○市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則

明治二十五年二月十日（改正三二年省令二八號三五年省令一二號三七年省令文部省令第二號四〇年省令一四號四一年省令一七號）

明治二十三年法律第九十號市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十四條ニ基キ市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

第一章　退隱料ノ請求

第一條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第二條第三條第四條第七條ニ依リ退隱料ヲ受クヘキ者ハ退隱料請求書ヲ作リ退職ノ際勤務セシ小學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ（四〇年省令一四號）

第二條　退隱料請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　在職中ノ履歷書

二　戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本但市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第七條ニ掲ケタル者ハ之ヲ要セス（三二年省令二八號）

第三條　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外尙左ノ書類ヲ添付スヘシ官吏恩給法第六條ヲ適用スヘキ者亦同シ

一　現認證書若クハ事實ヲ證スル公文ノ寫又ハ口供書

二　醫師ノ診斷書

第四條（四〇年省令一四號）　退隱料請求書ヲ受ケタル府縣知事ハ事實ヲ取調請求ノ理由アリト認ムルトキハ退隱

料證書ヲ作リ之ヲ本人ニ交付スヘシ但退隱料增加ノ爲更ニ退隱料證書ヲ交付シタル證書ヲ返納セシムヘシ

第五條（同上）府縣知事ニ於テ前條ノ請求其理由ナシト認ムルトキハ理由ヲ示シ之ヲ本人ニ通告スヘシ

第六條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第八條ニ依リ給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作リ在職中ノ履歷書ヲ添ヘ最終勤務セシ小學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ（四〇年省一四號 四一年省一一七號）府縣知事ハ事實ヲ取調請求ノ理由アリト認ムルトキハ辭令書ヲ作リ之ヲ本人ニ交付スヘシ（四〇年省一四號）

第二章　扶助料ノ請求

第七條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第十一條第一項第十二條ニ依リ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ作リ退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在リテハ死者ノ最終勤務セシ小學校所屬府縣知事ニ退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ在テハ居住地ノ府縣知事ニ差出スヘシ（三五年省一三號 四〇年省一四號）府縣知事ハ其所屬市町村立小學校正教員遺族ノ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者アルトキハ死者ノ履歷書ヲ調製シ之ヲ遺族ニ交付スヘシ（四〇年省一四號）

第八條　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ニハ戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本及左ノ書類ヲ添付スヘシ（三二年省二八號）

一　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第一第二第十二條ニ當ル者ノ請求書ニハ府縣知事ヨリ交付セラレタル死者ノ履歷書（四〇年省一四號）

二　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十條第三ニ當ル者ノ請求書ニハ死者ノ退隱料證書

三　官吏遺族扶助法第四條第二項ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ傷痍若クハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據書類醫師ヲシテ診察セシメタルトキハ其診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第二ノ書類

四　扶助料ヲ受クル者死去シ又ハ權利消滅シタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ扶助料證書

五　公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ確定裁判ノ宣告書寫

六　官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ其事由ヲ詳記シタル書類醫師ノ診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第二ノ書類公務ニ起因スル傷痍若クハ疾病ニ依リ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第三ノ書類扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ孤兒ニ在テハ本條第四ノ書類

第九條（四〇年省一四號）　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ受ケタル府縣知事ハ事實ヲ取調請求ノ理由アリト認ムルトキハ扶助料ニ在リテハ扶助料證書、扶助金ニ在リテハ辭令書ヲ作リ之ヲ本人ニ交付スヘシ」前項ノ扶助料又ハ扶助金他ノ地方廳ニ於テ支給スヘキモノナルトキハ其請求書ヲ當該府縣知事ニ送付スヘシ

第十條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第十一條第二項ニ掲ケタル給與金ノ請求等ハ扶助金ノ例ニ依ルヘシ但痍疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者ノ請求書ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第三章　退隱料扶助料ノ支給及停止

第十一條　退隱料支給ノ期ハ退職ノ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス

退隱料及扶助料ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ支給スヘシ但權利消滅ノトキ及給與金扶助金ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給スヘシ

第十二條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第十三條（三二年省一二八號）　退隱料ヲ受クヘキ權利消滅シ若クハ停止セラルヘキ者ノ支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ裁判確定ノ日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル（三七年省二一一號）

二　公務ニ就キ受クル給料ト退隱料トヲ合シタル金額退職現時ノ給料額ヲ超過スルトキハ其給料ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ其差額ノ支給ヲ停メ其給料ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（四〇年省一四號）

三　五箇年以上受領ヲ怠リタルトキハ受領ヲ怠リタル支給期月ノ翌月ヨリ起算シ其怠リタル期ノ支給ヲ廢ス

四　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（三七年省二一一號）

第十四條　扶助料支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ルヘシ

一　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日、重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ終ル（三七年省二一一號）

二　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（同上）

三　公權停止中轉給ヲ受クヘキ者ノ支給ハ本人停止ノ翌日ヨリ以テ始メ復給ノ前日ヲ以テ終ル

第十五條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第三條ニ揭ケタル增加退隱料ノ等差ハ左ノ如シ

第一項　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ　十分ノ七

第二項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ六

第三項　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ五

第四項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ四

第五項　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ三

第六項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第十六條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者他ノ市町村ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ轉籍若クハ寄留シタル地ノ市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ府縣知事ニ屆出ヘシ（四一年省一七號）

他ノ府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ轉籍若クハ寄留シタル地ノ市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ府縣知事ニ屆出ヘシ（同上）

退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ハ毎期支給スヘキ退隱料又ハ扶助料ヲ轉籍若クハ寄留シタル地ノ府縣知事ニ送付シ其支給方ヲ委託スルコトヲ得（四〇年省一四號）

第十七條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ又ハ公權ヲ停止セラレタルトキハ本籍市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヨリ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ報告スヘシ（四一年省一七號）

第十八條（四一年省一七號）　退隱料ヲ受クル者有給ノ公務ニ就キタルトキハ當該官公署ノ證明ヲ得テ退隱料ヲ支給スヘキ府縣知事ニ屆出ヘシ給料額ニ增減ヲ生シタルトキ其ノ職ヲ罷メタルトキ亦同シ其ノ屆書ニハ職名、給料額及給料ノ支給ヲ受クル最初ノ日罷職ノトキハ支給ヲ受クル最終ノ日ヲ附記スヘシ」

前項ノ屆書ハ就職ノ場合ニ在リテハ就職ノ日ヨリ十四日以內給料額ニ增減ヲ生シタル場合ニ在リテハ增減ヲ生シタル日ヨリ十日以內ニ之ヲ差出スヘシ

第十九條　第十七條ノ場合ニ於テ扶助料ヲ受クヘキ者又ハ其轉給ヲ受クヘキ者ナキトキ又ハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失ヒ若クハ扶助料ノ支給ヲ廢スヘキ者ニ係ルトキハ本籍市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ收メテ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ送付スヘシ（同上）

本人他ノ市町村ニ居住セル場合ニ於テハ該市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ニ委託シテ之ヲ收ムルコトヲ得（同上）

第四章　雜則

第二十條　府縣知事ハ第四條又ハ第九條ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ本人ニ交付スルト同時ニ之ヲ其本籍市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ニ通知スヘシ（四〇年省一四號　四一年省一七號）

第二十一條　水火災盜難等ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ屆出ヘシ（四〇年省一七號）

府縣知事ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ヲ作リ之ヲ交付スヘシ

前項退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ效力アルモノトス

第二十二條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ添ヘ居住地ノ市町村長（市ノ區長カ戶籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ支給スヘキ地ノ府縣知事ニ屆出ヘシ

府縣知事ハ證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ署名捺印シテ之ヲ本人ニ交付スヘシ（同上）

第二十三條　此規則ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村長ノ職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ島司郡區長戶長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

○府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

（明治二十三年十月二日法律第九十一號　改正三二年法九〇號　四一年法五五號）

朕府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法

第一條　府縣立師範學校長ノ俸給ハ國庫ノ負擔トス

第二條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ハ此法律ノ規定ニ從ヒ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ有ス（三二年法九〇號）

第三條　在職滿十五年以上ノ者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ終身退隱料ヲ給ス

一　年齡六十歲ヲ超エ退職ヲ命シタルトキ

二　傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

三　廢職廢校ニ依リ退職シ又ハ學校編成ノ變更ニ依リ退職ヲ命シタルトキ（四一年法五五號）

第四條　左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ前條ノ年限ニ滿タサルモ終身退隱料ヲ給シ尙其最下金額十分ノ七マテノ增加退隱料ヲ給ス

一　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサル爲退職ヲ命シタルトキ

二　職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ一肢以上ノ用ヲ失ヒ若クハ之ニ準スヘキ者ニシテ其職務ニ堪ヘサルカ爲退職ヲ命シタルトキ

第五條　退隱料ノ年額ハ退職現時ノ俸給ト在職年數トニ依リ之ヲ定ム（同上）

勤續滿十五年以上ニシテ退職シタル者ノ退隱料年額ハ勤續滿十五年ニ對シテハ俸給年額ノ百分ノ二十五トシ次ニ滿十五年以上ノ勤續年數中十五年ヲ控除シタルモノニ對シ一年毎ニ百分ノ一ヲ加ヘ次ニ其他ノ在職年數ニ對シ一年毎ニ百五十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム（同上）

前項ノ場合ヲ除クノ外在職滿十五年以上ニシテ退職シタル者ノ退隱料年額ハ在職滿十五年ニ對シテハ俸給年額ノ百分ノ二十五トシ爾後在職一年毎ニ二百四十分ノ一ヲ加ヘ滿四十年ニ至テ止ム（同上）

前二項ノ場合ニ於テ在職四十年以上ノ者ニ給スヘキ退隱料ハ四十年ノ額トシ又前條ニ依リ給スヘキ退隱料ハ前項ニ依リ算出シタル十五年ノ額トス（同上）

官吏恩給法第五條第四項第五項第六條第十條第十一條及第十三條第二項ハ退隱料ニ之ヲ準用ス（同上）

退隱料等ノ支給上ニ關スル在職年數ノ算定ニ關スル規則ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム（三二年法九〇號）

第六條（三二年法九〇號）

第七條（四一年法五五號）　退隱料ヲ受クル者重罪ノ刑ニ處セラレ若クハ日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ退隱料ヲ剝奪ス

退隱料ヲ受クル者左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其間退隱料ノ支給ヲ停止ス但第一號ノ場合ニ於テハ其差額ニ限リ支給ヲ停止ス

一　公務ニ就キ受クル給料ト退隱料トヲ合シタル金額退職現時ノ給料額ヲ超過スルトキ

二　公權ヲ停止セラレタルトキ

第八條　年齡未タ六十歲ニ至ラスシテ自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若クハ失職ニ該當シタル者ハ退隱料ヲ受クルノ資格ヲ失フモノトス

第九條　府縣立師範學校及公立中學校ノ准敎員ハ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ第四條ニ該當スル者ニ限リ退職現時ノ俸給四分ノ一ノ退隱料ヲ終身給與ス

第十條（三二年法九號）　在職滿一年以上ニシテ退職シタル府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正敎員舍監及書記ニハ退職現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在職年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金員ヲ一時給與ス但非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シタル者ハ本職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給與ス

公立學校職員ニシテ敎育事務ニ從事スル文官又ハ他ノ待遇文官ニ轉任シタル者退官又ハ退職シタルトキハ公立學校職員ノ在職年數ニ應シ前項ノ給與金ヲ給ス（四一年法五五號）

第三條若クハ第四條ニ依リ退隱料ヲ受クル者、他ノ法律ニ依リ退隱料若クハ恩給ヲ受クル者、自己ノ便宜ニ依リ退職退官シタル者又ハ懲戒處分ニ依リ免職免官ニ處セラレ若クハ刑事裁判ニ依リ失職失官ニ該當シタル者ハ前二項ノ限ニ在ラス（同上）

本條ノ退職給與金ヲ受ケタル者公立學校職員ニ再任シ爾後退職シタルトキハ第一項ノ在職年數ハ其

再任ノ月ヨリ起算ス(同上)

本條ノ給與及之ニ關スル費用ハ轉任者退職者ノ轉任退職ノ際勤務セシ公立學校所屬府縣郡市町村ノ負擔トス(同上)

第十一條　退隱料ノ支給ハ府縣知事ノ證明ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

官吏恩給法第十六條及第十八條ハ退隱料ニ適用ス

第十二條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記左ノ事項ノ一ニ當ルトキハ其遺族ハ此法律ノ規定ニ從ヒ扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス(三二年法九〇號)

一　在職十五年以上ノ者在職中死去シタルトキ

二　在職十五年未滿ノ者職務ノ爲死去シタルトキ

三　退隱料ヲ受クル者死去シタルトキ

第十三條　官吏遺族扶助法第四條乃至第十條第十二條乃至第十六條ハ此法律ニ規定スル扶助料ニ適用ス

官吏遺族扶助法第十一條ハ此法律ニ規定スル扶助料ヲ受クヘキ寡婦孤兒又ハ父母祖父母ナクシテ死去シタル者ノ戸籍內ニ在ル二十歲未滿又ハ廢疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル兄弟姉妹アリテ之ヲ給養スル者ナキ場合ニ適用ス

第十四條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ニシテ在職十五年未滿ノ者在職中職務ノ故ニアラスシテ死去シタルトキハ其遺族ニ一時扶助金ヲ給ス(同上)

前項ノ扶助金ニ就キテハ官吏遺族扶助法第十七條第二項ヲ適用ス

第十五條　扶助料及扶助金ノ支給竝第十三條第二項ノ給與ハ府縣知事ノ申牒ニ依リ文部大臣之ヲ裁定ス

第十六條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ハ其俸給百分ノ一ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ(同上)

府縣郡市町村ハ其府縣立師範學校及公立中學校長正教員舍監及書記ノ俸給百分ノ一ニ當ル金員ヲ毎年國庫ニ納ムヘシ(同上)

兼職ニ係ル加俸ニ對シテハ本條ノ納金ヲ要セス(同上)

第十七條　退隱料扶助料扶助金及第十三條第二項ノ給與竝其支給ニ關スル費用ハ國庫ノ負擔トス

退隱料扶助料扶助金等ノ支給ニ關スル規則ハ文部大臣之ヲ定ム

第十八條(三二年法九〇號)

第十九條(同上)

第二十條　此法律第一條ハ明治二十五年度ヨリ第二條乃至第十九條ハ明治二十六年度ヨリ之ヲ施行ス

第二十一條　府縣制郡制又ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テ此法律ノ條規ニ對シ特例ヲ設クルコトヲ必要トスルトキハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

明治四十一年五月一日法律第五十五號附則

本法ハ明治四十一年五月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前退隱料ヲ受ケタル者ニシテ本法施行後再公立學校職員ト爲リ在職滿三年以上ニ至ラスシテ退職シタル者ノ退隱料額算定方ハ仍從前ノ例ニ依ル

○府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於ケル學校職員ノ資格及在職ノ年數算定ニ關スル件

明治三十二年五月十六日
勅令第百九十六號

朕明治二十五年勅令第十七號改正ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員トアルハ教諭助教諭訓導トシ准教員トアルハ其ノ他ノ教員トス

第二條　府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監及書記ノ在職年數ハ就職ノ月ヨリ起算シ退職ノ月ヲ以テ終リトス

明治十四年六月以前ヨリ在職ノ者ハ同年同月ヨリ起算ス

府縣立師範學校長非職又ハ休職中ノ年數及月數並府縣立師範學校長補在職中ノ年數及月數ハ在職年數ニ算入スヘシ公立中學校長並府縣立師範學校及公立中學校ノ正教員舍監書記休職中ノ年數及月數亦同シ

第三條　左ニ掲クル年數及月數ハ在職年數ヨリ除算スヘシ

一　自己ノ便宜ニ依リ退職シタル者又ハ免職ニ處セラレ若ハ失職ニ該當シタル者再就職シタルトキハ其ノ前在職ノ年數及月數

二　恩給若ハ退隱料ヲ受クヘキ職ニ在ル者ニシテ府縣立師範學校及公立中學校ノ學校長正教員舍監書記ヲ兼ヌルトキハ其ノ兼職中ノ年數及月數

三　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十九條ニ依ル退隱料ヲ受クル者ハ其ノ退隱料ヲ受クヘキ事由ノ生シタル前ノ在職年數及月數

○公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則

明治二十五年二月十日
文部省令第一號
（改正三二年省令二七號、三五年省令一一號、三七年省令二〇號、四一年省令一六號）

明治二十三年十月法律第九十一號府縣立師範學校長俸給並公立學校教員退隱料及遺族扶助料法第十七條ニ基キ公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則ヲ定ムルコト左ノ如シ

公立學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則

第一章　退隱料ノ請求

第一條　府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第三條第四條第五條第九條ニ依リ退隱料ヲ受クヘキ者ハ退隱料請求書ヲ作リ退職ノ際勤務セシ學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ（四一年省令一六號）

第二條　退隱料請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　在職中ノ履歷書

二　戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本但府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第九條ニ掲ケタル者ハ之ヲ要セス（三二年省令二七號）

第三條　職務ニ依リ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外尙左ノ書類ヲ添付スヘシ官吏恩給法第六條ヲ適用スヘキ者亦同シ

一　現認證書若クハ事實ヲ證スル公文ノ寫又ハ口供書
二　醫師ノ診斷書

第四條　退隱料請求書ヲ受ケタル府縣知事ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認ムルトキハ退隱料年額計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ文部大臣ニ差出スヘシ

府縣知事ニ於テ請求ノ理由ナシト認ムルトキハ意見ヲ具シテ之ヲ文部大臣ニ差出スヘシ

第五條　文部大臣ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ退隱料證書ヲ作リ府縣知事ヲシテ之ヲ本人ニ交付セシム但退隱料增加ノ爲更ニ退隱料證書ヲ交付スルトキハ前ニ交付シタル證書ヲ返納セシム

第六條（三二年省令二七號）

第七條　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十條第一項ニ依リ給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作リ在職中ノ履歷書ヲ添付シ最終ニ勤務セシ學校所屬府縣知事ニ差出スヘシ（四一年省令一六號）

府縣知事ニ於テ本條第一項ノ請求ヲ許可シタルトキハ辭令書ヲ作リ之ヲ本人ニ交付スヘシ

第二章　扶助料ノ請求

第八條　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條第十三條第一項第十四條ニ依リ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ作リ退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ死者ノ最終勤務セシ學校所屬府縣知事ニ退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ在テハ居住地ノ府縣知事ニ差出スヘシ（三五年省令一一號）

府縣知事ハ其所屬公立學校職員遺族ノ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者アルトキハ扶助料又ハ扶助金ノ請求上必要ノ書類ヲ遺族ニ交付スヘシ（四一年省令一六號）

第九條　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ニハ戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本及左ノ書類ヲ添付スヘシ（三二年省令二七號）

一　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條第一第二第十四條ニ當ル者ノ請求書ニハ府縣知事ヨリ交付シタル死者ノ履歷書

二　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十二條第三ニ當ル者ノ請求書ニハ死者ノ退隱料證書

三　官吏遺族扶助法第四條第二項ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ傷痍若クハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據書類醫師ヲシテ診察セシメタルトキハ其診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第二ノ書類

四　扶助料ヲ受クル者死去シ又ハ權利消滅シタルトキ其扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ扶助料證書

五　公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ確定裁判ノ宣告書寫

六　官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ其事由ヲ詳記シタル書類醫師ノ診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第三ノ書類公務ニ起因スル傷痍若クハ疾病ニ依リ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第四ノ書類

第十條　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ受ケタル府縣知事ハ査覈ノ上扶助料年額計算書又ハ扶助金計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ文部大臣ニ差出スヘシ

文部大臣ニ於テ前項ノ請求ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作リ府縣知事ヲシテ之ヲ本人ニ交付セ

シム其扶助金ニ係ルモノハ辭令ヲ用フ

第十一條（三二年省二七號）　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第十三條第二項ニ掲ケタル給與金ノ請求等ハ扶助金ノ例ニ依ル但癈疾若クハ不具ニシテ産業ヲ營ムコト能ハサル者ノ請求書ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第三章　退隱料扶助料ノ支給及停止

第十三條　退隱料支給ノ期ハ退職ノ翌月ヨリ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス

退隱料又ハ扶助料ハ其年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其前三箇月分ヲ本人居住地ノ府縣知事ヲ經テ支給ス但權利消滅ノトキ及給與金扶助金ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第十四條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者其金額ヲ受領セントスルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ以テ其受領權アルコトヲ證明スヘシ

第十五條（三二年省二七號）　退隱料ヲ受クヘキ權利消滅シ若クハ停止セラルヘキ者ノ支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一　重罪ノ刑ニ所セラレタルトキハ裁判確定ノ日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル（三七年省二〇號）

二　公務ニ就キ受クル給料ト退隱料トヲ合シタル金額退職現時ノ給料額ヲ超過スルトキハ其ノ給料ノ支給ヲ始ムル日ノ前日ヲ以テ其ノ差額ノ支給ヲ停メ其ノ給料ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（四一年省一六號）

三　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（三七年省二〇號）

第十六條　扶助料支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其失ヒタル日重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ終ル（三七年省二〇號）

二　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ裁判確定ノ日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス（同上）

三　公權停止中轉給ヲ受クヘキ者ノ支給ハ本人停止ノ翌日ヲ以テ始メ復給ノ前日ヲ以テ終ル

第十七條　府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法第四條ニ掲ケタル增加退隱料ノ等差ハ左ノ如シ

第一項　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ　十分ノ七

第二項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ六

第三項　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ五

第四項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ四

第五項　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ三

第六項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第十八條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者他ノ府縣ニ轉籍若クハ寄留スルトキハ從來居住地ノ府縣知事及轉籍若クハ寄留シタル地ノ府縣知事ニ屆出ヘシ

府縣知事ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ甲乙兩廳間互ニ其ノ者ニ係ル退隱料若クハ扶助料ノ支給方ノ受繼ヲナシ其ノ引繼ヲ受ケタル府縣知事ハ遲滯ナク之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ（四一年省一六號）

第十九條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死去シ若クハ權利消滅シ又ハ公權ヲ停止セラレタルトキハ本籍市町村長（市ノ區長カ戸籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヨリ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ報告スヘシ（同上）

第二十條（四一年省令六號）　退隱料ヲ受クル者有給ノ公務ニ就キタルトキハ當該官公署ノ證明ヲ得テ退隱料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ屆出ヘシ給料額ニ增減ヲ生シタルトキ其ノ職ヲ罷メタルトキ亦同シ其ノ屆書ニハ職名、給料額及給料ノ支給ヲ受クル最初ノ日罷職ノトキハ支給ヲ受クル最終ノ日ヲ附記スヘシ」

前項ノ屆書ハ就職ノ場合ニ在リテハ就職ノ日ヨリ十四日以內ニ之ヲ差出スヘシ

ハ增減ヲ生シタル日ヨリ十日以內ニ之ヲ差出スヘシ

本條ノ屆出ヲ受ケタル府縣知事ハ遲滯ナク之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ

第二十一條　府縣知事ニ於テ第十九條ノ報告ヲ受ケタルトキハ退隱料又ハ扶助料ノ交付ヲ止メ之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ其遺族ニシテ扶助料ヲ受クベキ者又ハ其轉給ヲ受クヘキ者ナキトキ又ハ退隱料ヲ受クルノ權利ヲ失ヒ若クハ扶助料ノ支給ヲ廢スヘキ者ニ係ルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ收メテ之ヲ文部大臣ニ納付スヘシ（同上）

第四章　雜則

第二十二條　府縣知事ハ第五條又ハ第十條ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ本人ニ交付スルト同時ニ之ヲ本籍市町村長（市ノ區長カ戸籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ニ通知スヘシ（同上）

第二十三條　水火災盜難等ニ依リ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ居住地ノ市町村長（市ノ區長カ戸籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ屆出ヘシ（同上）

府縣知事ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ其事實ヲ調査シ亡失ノ事由ヲ具シテ文部大臣ニ申出ヘシ文部大臣ハ退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ヲ作リ府縣知事ヲシテ之ヲ本人ニ交付セシム

前項退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ效力アルモノトス

第二十四條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ添ヘ居住地ノ市町村長（市ノ區長カ戸籍吏ノ事務ヲ行フ場合ニハ區長）ヲ經テ退隱料又ハ扶助料ヲ交付スヘキ府縣知事ニ屆出ヘシ府縣知事ハ證書ノ裏面ニ其事實ヲ記載シ署名捺印シテ本人ニ交付シ之ヲ文部大臣ニ報告スヘシ（同上）

第二十五條　此規則ニ規定スル府縣知事ノ職務ハ北海道ニ於テハ北海道廳長官之ヲ行ヒ市町村長ノ職務ハ市制町村制ヲ施行セサル地方ニ於テハ島司郡區長戸長又ハ之ニ準スヘキ者之ヲ行フヘシ

○公立學校職員退隱料等ニ關スル法

明治二十九年三月二十三日
法律第十三號
（改正三二年法九一號、三九年法三〇號、四〇年法一號）

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル公立學校職員退隱料等ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條（三二年法九一號）　明治二十三年法律第九十號ハ第十五條ヲ除キ公立實業補習學校ノ教員及小學校ノ本科正教員タルヘキ資格ヲ有スル公立幼稚園ノ保姆ニ適用シ同年法律第九十一號ハ第一條及第二十條ヲ除キ公立ノ高等女學校、專門學校、實業學校（實業補習學校ヲ除ク）及其ノ他ノ公立學校ノ學校長、教員、舍監及書記並公立圖書館長、司書及書記ニ適用ス（三九年法三〇號、四〇年法一號）

第二條　明治二十三年法律第九十號第二條及同年法律第九十一號第三條ハ非職又ハ休職滿期ニ依リ退職シ及校務ノ伸縮ニ依リ退職ヲ命シタル場合ニモ適用ス

退隱料ハ本職最終ノ俸額ニ依リ之ヲ算定ス

第三條　明治二十三年法律第九十號同年法律第九十一號及此ノ法律ニ依リ退隱料等ヲ受クヘキ學校長、圖書館長、正教員、司書、保姆、舍監及書記ノ在職年月數ハ各公立學校及圖書館ノ間ニ於テハ之ヲ通算ス（三二年法九一號、三九年法三〇號、四〇年法一號）

第四條　府縣立師範學校長タリシ者他ノ文官ト爲リ若ハ他ノ文官タリシ者府縣立師範學校長ト爲リタルトキハ其ノ在官年月數ハ明治二十三年法律第九十一號及官吏恩給法ニ於テハ各其ノ規定スル所ニ依リ其ノ在官年數若ハ在職年數中ニ通算スヘキモノトス

第四條ノ二（三二年法九一號）　學校長、圖書館長、正教員、司書、保姆、舍監又ハ書記タリシ者教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官ト爲リタルトキ若ハ教官其ノ他教育事務ニ從事スル文官タリシ者學校長、圖書館長、正教員、司書、保姆、舍監又ハ書記ト爲リタルトキハ各其ノ在官在職年數ヲ通算シ明治二十三年法律第九十號及同年法律第九十一號ノ退隱料扶助料扶助金ヲ受クルコトヲ得（三九年法三〇號、四〇年法一號）

第四ノ三（同上）　同一人ニシテ國庫ヨリ公立學校職員退隱料及官吏恩給又ハ軍人恩給（賑恤金、給助金、扶助料ヲ除ク）若ハ同一ノ事由ノ爲メニ公立學校職員遺族扶助料及官吏遺族扶助法又ハ軍人恩給法ニ依レル扶助料ヲ併セ受クヘキ者アルトキハ本人ノ所擇ニ任セ其ノ一ヲ給ス

附　則

第五條　此ノ法律ハ明治二十九年四月一日ヨリ施行ス

明治四十年法律第一號附則

本法ハ明治四十年十月一日ヨリ之ヲ施行ス

公立圖書館職員ノ在職年數ハ退隱料、退職給與金、扶助料及扶助金ノ支給ニ關シテハ明治三十二年十一月以後就職ノ月ヨリ之ヲ起算ス

○公立學校職員退隱料等ニ關スル法ノ施行ニ關スル件

明治三十二年五月十六日（改正三二年勅四二三號、四一年勅一三號）
勅令第二百一號

朕明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治二十九年法律第十三號ニ於ケル正教員准教員ノ別左ノ如シ

一　公立實業補習學校ニ於テハ訓導及訓導ノ資格アル學校長ヲ以テ正教員トシ准訓導ヲ以テ准教員トス

二　公立ノ高等女學校專門學校實業學校（實業補習學校ヲ除ク）其ノ他ノ公立學校ニ於テハ教諭助教諭訓導ヲ以テ正教員トシ其ノ他ノ教員ヲ以テ准教員トス

第二條　明治二十九年法律第十三號ニ於テ通算スルコトヲ得ヘキ文官ノ種類左ノ如シ

一　官立ノ學校及圖書館職員

二　文部省官吏

三　教育事務ニ從事スル北海道府縣郡區島廳臺灣總督府廳統監府關東都督府樺太廳官吏（三二年勅四二三號、四一年勅一三號）

第三條　前條ニ掲クル文官ノ在官年數ヲ公立學校職員ノ在職年數ト通算スル場合ニ於テ算入又ハ除算スヘキ年月數ハ官吏恩給法及官吏遺族扶助法ノ例ニ依ル

第四條　明治二十四年勅令第二百四十八號明治二十五年勅令第五號同年勅令第十八號同年勅令第三十二號及明治三十二年勅令第百九十六號ハ明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關シ特ニ規定スルモノヲ除クノ外之ヲ準用ス

附　別

第五條　明治二十九年勅令第百九號ハ廢止ス

○公立學校職員退隱料等ニ關スル件施行ニ關スル規定

明治三十二年五月十八日
文部省令第二十九號

明治二十九年法律第十三號ノ施行ニ關スル規定ヲ設クルコト左ノ如シ

第一條　國庫ヨリ他ノ退隱料又ハ恩給ヲ受クル者又ハ受クヘキ權利ヲ有スル者ニシテ府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ退隱料ヲ請求スルトキハ同時ニ國庫ヨリ他ノ退隱料若クハ恩給ヲ受ケサル旨ヲ請求書ニ記載スヘシ

第二條　國庫ヨリ他ノ扶助料ヲ受クル者又ハ受クヘキ權利ヲ有スル者ニシテ府縣立師範學校長俸給竝公立學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依リ扶助料ヲ請求スルトキハ同時ニ國庫ヨリ他ノ扶助料ヲ受ケサル旨ヲ請求書ニ記載スヘシ

第三條　教官其他教育事務ニ從事スル文官タリシ者ニシテ明治二十九年法律第十三號第四條ノ二ニ該當シ退隱料扶助料扶助金ヲ受クヘキ者トアルハ其前職ニ屬スル種類ノ退隱料扶助料扶助金ヲ支給ス

第四條　明治二十四年文部省令第七號同第二十四號明治二十五年文部省令第一號同第二號明治二十七年文部省令第三號ハ明治二十九年法律第十三號施行上之ヲ準用ス

附　則

第五條　明治二十九年文部省令第四號ハ廢止ス

○臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員ノ退隱料及遺族扶助料ニ關スル法

明治三十三年三月三十日
法律第七十七號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル臺灣ニ於テ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員ノ退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員及其ノ遺族ハ本法ノ規定ニ依リ退隱料及遺族扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

第二條　明治二十三年法律第九十一號及之ニ基ツキテ發シタル勅令ハ前條ノ學校職員及其ノ遺族ニ之ヲ準用ス但シ同法中府縣知事ノ職務ハ縣知事又ハ廳長、文部大臣ノ職務ハ臺灣總督之ヲ行ヒ同法第十條中府縣郡市町村ノ負擔トナルヘキ經費ハ地方稅ヲ以テ之ヲ支辨ス

第三條　第一條ノ學校職員ノ臺灣ニ於ケル在職年數ハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ニ準シテ之ヲ計算ス

第一條ノ學校職員臺灣ニ於テ風土病又ハ流行病ニ罹リタル場合ニ關シテハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ニ準シテ退隱料ヲ給ス

第一條ノ學校職員前項ニ該當シ之カ爲死亡シタル者ノ遺族ハ臺灣ニ在勤スル文官判任以上ノ者ニシテ國庫ヨリ俸給ヲ受クル者ノ遺族ニ準シ扶助料ヲ給ス

第四條　明治二十九年法律第十三號及之ニ基ツキテ發シタル勅令ハ第一條ノ學校職員ニ關シテ之ヲ準用ス

第五條　臺灣人ニシテ地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員及其ノ遺族ハ第二條及第四條ノ規定ニ依リ退隱料及遺族扶助料ヲ受クルノ權利ヲ有ス

附　則

本法ハ明治三十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則

臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ者ニシ通相定ム

臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則左ノ通相定ム

臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則

明治三十四年七月二十日臺灣總督府令第四十六號（改正三四年府令九七號三七年府令一一號）

第一條　明治三十三年法律第七十七號ニ依リ退隱料ヲ受クヘキ者ハ退隱料請求書ヲ作リ退職ノ際勤務セシ學校所屬廳長ニ差出スヘシ（三四年府令九七號）

第二條　退隱料請求書ニハ左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　在職中ノ履歷書

二　戶籍吏ノ作リタル戶籍謄本若クハ廳長ノ證明シタル戶籍調書（同上）

第三條　明治二十三年法律第九十一號第四條ニ依リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外尙左ノ書類ヲ添付スヘシ官吏恩給法第六條ヲ適用スヘキ者亦同シ

一　現認證書若クハ事實ヲ證スル公文ノ寫又ハ口供書

二　醫師ノ診斷書

明治三十三年法律第七十七號第三條第二項ニ依リ退隱料ヲ請求スル者ハ前條ニ掲クル書類ノ外尙醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第四條　退隱料請求書ヲ受ケタル廳長ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認メタルトキハ退隱料年額計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ臺灣總督ニ差出スヘシ（同上）

廳長ニ於テ請求ノ理由ナシト認メタルトキハ意見ヲ具シテ臺灣總督ニ差出スヘシ（同上）

第五條　臺灣總督ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ退隱料證書ヲ作リ廳長ヲシテ之ヲ本人ニ交付セシム但シ退隱料增加ノ爲更ニ退隱料證書ヲ交付スルトキハ前ニ交付シタル證書ヲ返納セシム（同上）

第六條　明治二十三年法律第九十一號第十條第一項ニ依リ給與金ヲ受クヘキ者ハ給與金請求書ヲ作リ在職中ノ履歷書ヲ添付シ退職ノ際勤務セシ學校所屬廳長ニ差出スヘシ（同上）

廳長ニ於テ前項ノ請求ヲ受ケタルトキハ査覈ノ上意見ヲ具シテ臺灣總督ニ差出スヘシ（同上）

臺灣總督ニ於テ第一項ノ請求ヲ許可シタルトキハ辭令書ヲ作リ廳長ヲシテ本人ニ交付セシム（同上）

第七條　明治二十三年法律第九十一號第十二條第十三條第一項第十四條若クハ明治三十三年法律第七十七號第三條第三項ニ依リ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ作リ

親族二名親族ナキトキハ近鄰ノ戸主二名連署シ退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ死者ノ最終勤務セシ學校所屬廳長ニ退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ニ在テハ臺灣總督ニ差出スヘシ（三四年府九七號 三七年府一一號）

廳長ハ其ノ所屬學校職員遺族ノ扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者アルトキハ扶助料又ハ扶助金ノ請求上必要ノ書類ヲ遺族ニ交付スヘシ（三四年府九七號）

第八條　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ニハ戸籍吏ノ作リタル戸籍謄本又ハ廳長ノ證明シタル戸籍調書及左ノ書類ヲ添付スヘシ

一　明治二十三年法律第九十一號第十二條第一第二第十四條ニ當ル者ノ請求書ニハ廳長ヨリ交付シタル死者ノ履歷書（同上）

二　明治三十三年法律第七十七號第三條第三項ニ當ル者ノ請求書ニハ廳長ヨリ交付シタル死者ノ履歷書及醫師ノ診斷書（同上）

三　明治二十三年法律第九十一號第十二條第三ニ當ル者ノ請求書ニハ死者ノ退隱料證書

四　官吏遺族扶助法第四條第二項ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ傷痍若クハ疾病ノ職務ニ起因シタル證據書類醫師ヲシテ診斷セシメタルトキハ其ノ診斷書及退隱料ヲ受ケスシテ死去シタル者ヲ遺族ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ遺族ニ在テハ本條第三ノ書類

五　扶助料ヲ受クル者死去シ又ハ權利消滅シタルトキハ其ノ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ扶助料證書

六　公權停止ニ依リ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ノ請求書ニハ前者ノ確定裁判宣告書寫

七　官吏遺族扶助法第十五條ヲ適用スヘキ者ノ請求書ニハ其ノ事由ヲ詳記シタル書類醫師ノ診斷書及退隱料ヲ受クスシテ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第一ノ書類退隱料ヲ受ケ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第四ノ書類扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ孤兒ニ在テハ本條第三ノ書類公務ニ起因スル傷痍若クハ疾病ニ依リ死去シタル者ノ孤兒ニ在テハ本條第五ノ書類

第九條　扶助料請求書又ハ扶助金請求書ヲ受ケタル廳長ハ査覈ノ上請求ノ理由アリト認メタルトキハ扶助料年額計算書又ハ扶助金計算書ヲ作リ證據書類ヲ添ヘ臺灣總督ニ差出スヘシ

廳長ニ於テ請求ノ理由ナシト認メタルトキハ意見ヲ具シテ臺灣總督ニ差出スヘシ

第十條　臺灣總督ニ於テ前條ノ請求ヲ許可シタルトキハ扶助料證書ヲ作リ廳長ヲシテ本人ニ交付セシム其ノ扶助金ニ係ルモノハ辭令書ヲ用フ。

第十一條　明治二十三年法律第九十一號第十三條第二項ニ揭ケタル給與金ノ請求等ハ扶助金ノ例ニ依ル但シ癈疾若クハ不具ニシテ產業ヲ營ムコト能ハサル者ノ請求書ニハ醫師ノ診斷書ヲ添付スヘシ

第十二條　退隱料支給ノ期ハ退職ノ翌月ニ始マリ死去ノ月ヲ以テ終ルモノトス

退隱料又ハ扶助料ハ其ノ年額ヲ四分シ四月七月十月一月ニ於テ其ノ前三箇月分ヲ本人居住地ノ廳長ヲ經テ支給ス但シ權利消滅ノトキ及給與金扶助金ハ期月ニ拘ラス之ヲ支給ス

第十三條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者其ノ金額ヲ受領セントスルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ以テ其ノ受領權アルコトヲ證明スヘシ

第十四條　退隱料ヲ受クヘキ權利消滅シ若クハ停止セラルヘキ者ノ支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一　重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日、日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其ノ失ヒタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二　公務ニ就キ退職現時ノ俸給額ト同額以上ノ給料ヲ受クルトキハ其ノ給料ノ支給ヲ初ムル日ノ前

日ヲ以テ支給ヲ停メ其ノ給料ノ支給ヲ終リタル日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

三　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

第十五條　扶助料支給ノ終始ハ左ノ各項ニ依ル

一　日本臣民タルノ分限ヲ失ヒタルトキハ其ノ失ヒタル日、重罪ノ刑ニ處セラレタルトキハ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ終ル

二　公權ヲ停止セラレタルトキハ禁錮ノ刑ニ處セラレ若クハ監視ニ付セラルヘキ確定裁判ノ宣告ヲ受ケタル日ヲ以テ支給ヲ停メ刑期滿限ノ日ノ翌日ヨリ支給ヲ復ス

三　公權停止中轉給ヲ受クヘキ者ノ支給ハ本人停止ノ翌日ヲ以テ始メ復給ノ前日ヲ以テ終ル

第十六條　明治二十三年法律第九十一號第四條ニ掲ケタル增加退隱料ノ等差ハ左ノ如シ

第一項　兩眼ヲ盲シ若クハ二肢以上ヲ亡シタルトキ　十分ノ七

第二項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ六

第三項　一肢ヲ亡シ若クハ二肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ五

第四項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ四

第五項　一眼ヲ盲シ若クハ一肢ノ用ヲ失ヒタルトキ　十分ノ三

第六項　前項ニ準スヘキ傷痍ヲ受ケ若クハ疾病ニ罹リタルトキ　十分ノ二

傷痍疾病ノ等差ハ明治十八年太政官達第十六號文官傷痍疾病等差例ニ依ル

第十七條（三七年府一二號）　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者住所ヲ轉シタルトキハ臺灣總督ニ屆出ヘシ

第十八條（同上）　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者死亡シ若ハ權利消滅シ又ハ公權ヲ停止セラレタルトキハ戸主又ハ本人ヨリ臺灣總督ニ屆出ヘシ

前項死亡ノ場合ニ於テ扶助料ヲ受クヘキ遺族又ハ扶助料ノ轉給ヲ受クヘキ者ナキトキ若ハ退隱料又ハ扶助料ヲ受クル權ヲ失ヒタルトキハ屆出ト同時ニ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ返納スヘシ

第十九條（同上）

第二十條（同上）

第二十一條（同上）

第二十二條（同上）　水火盜難等ニ依リ退隱料證書又ハ遺族扶助料證書ヲ亡失シタル者ハ臺灣總督ニ屆出ヘシ

臺灣總督ニ於テ前項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ヲ作リ交付ス

前項退隱料證書又ハ扶助料證書ノ謄本ハ本證書ト同一ノ效力ヲ有ス

第二十三條（同上）　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者氏名ヲ改メタルトキハ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ添ヘ臺灣總督ニ屆出ヘシ臺灣總督ハ證書ノ裏面ニ其ノ事實ヲ記載シ署名捺印シテ本人ニ交付ス

○臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則ヲ內地ニ轉籍若クハ寄留シタル後準用ノ件

明治三十四年九月內務省第二十五號左ノ通改正ス

明治四十年三月五日內務省令第二號

臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則ヲ內地ニ轉籍若クハ寄留シタル後準用ノ件

明治三十三年法律第七十七號ニ依リ退隱料及遺族扶助料ヲ受クヘキ者內地ニ轉居シタルトキハ明治三十四年七月臺灣總督府令第四十六號ヲ準用ス但シ同規則第十二條中廳長ノ職務及同第二十三條臺灣總督ノ職務ハ北海道廳長官及府縣知事之ヲ行フ

前項ノ場合ニ於テ規則第十七條第十八條第二十二條及第二十三條ノ屆出ハ北海道廳長官、府縣知事ニ之ヲ爲スヘシ

官廳又ハ公署ニ於テ退隱料ヲ受クル者ヲ採用シタルトキハ退隱料ヲ交付スヘキ北海道廳長官、府縣知事又ハ臺灣總督ニ之ヲ通報スヘシ其ノ解職シタルトキ及俸給額ニ增減ヲ生シタルトキ亦同シ

前項ノ通報書ニハ俸給額及其ノ支給ヲ始ムル日又ハ支給ヲ終リタル日ヲ附記スヘシ

明治四十年三月五日
內務省訓令第二號

北海道廳　府縣

北海道廳長官府縣知事ニ於テ明治三十四年七月臺灣總督府令第四十六號臺灣ニ在勤スル地方稅支辨ノ俸給ヲ受クル文官判任以上ノ學校職員退隱料及遺族扶助料支給規則第十七條ノ屆出ヲ受ケタルトキハ甲乙廳間互ニ其ノ退隱料又ハ扶助料支給方ノ受繼ヲ爲シ同第十八條第一項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ退隱料又ハ扶助料ノ支給ヲ止メ臺灣總督ニ通知シ退隱料證書又ハ扶助料證書ヲ收メタルトキハ臺灣總督ニ送付シ同第二十二條第一項ノ屆出ヲ受ケタルトキハ臺灣總督ニ移牒シ同第二十三條ノ職務ヲ行ヒタルトキハ之ヲ臺灣總督ニ通報スヘシ

○樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料ニ關スル法

明治四十一年三月三十日
法律第三十五號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法第一條乃至第十三條及明治二十九年法律第十三號第二條ノ規定ハ樺太廳立小學校教員及其ノ遺族ニ關シ之ヲ準用ス但シ府縣知事ノ職務ハ樺太廳長官之ヲ行フ

第二條　本法ニ依ル給與ハ國庫ノ支辨トス

第三條　樺太廳立小學校正教員ハ其ノ給料額ノ百分ノ一ヲ國庫ニ納ムヘシ

第四條　市町村立小學校正教員ノ在職年月數樺太廳立小學校正教員ノ在職年月數ハ本法及市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料法ニ於テ相互之ヲ通算ス

府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隱料及遺族扶助料法、明治二十九年法律第十三號、明治三十三年法律第七十七號及在外指定學校職員退隱料及遺族扶助料法ニ依ル在職在官年月數ニ付テモ亦前項ニ同シ

前項ニ揭ケタル法律ニ依ル小學校ノ正教員ト樺太廳立小學校正教員トノ間ニ於ケル轉勤ハ之ヲ勤續ト看做ス

第五條　明治三十三年法律第七十五號第一條ノ規定ハ樺太廳立小學校正教員ノ退隱料及遺族扶助料ニ

之ヲ準用ス

附　則

本法ハ明治四十一年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

○樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給ニ關スル件

明治四十一年三月三十一日
勅令第七十一號

朕樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

第一條　明治二十五年勅令第十八號ハ樺太廳立小學校正教員ニ關シ之ヲ準用ス

第二條　左ニ掲クル年月數ハ正教員在職年數ニ算入スヘシ

一　小學校令ノ規定ニ依リ普通免許狀又ハ小學校正教員府縣免許狀ヲ有スル者ニシテ明治四十一年法律第三十五號施行前樺太廳小學校教員ノ職ニ在リタルトキハ其ノ在職ノ年月數

二　前號ニ掲クル免許狀ヲ有スル者ニシテ明治四十一年法律第三十五號施行前樺太民政署ニ於テ教育ノ事務ニ從事シタルトキハ其ノ在職ノ年月數

第三條　樺太廳立小學校教員ノ退隱料及遺族扶助料ノ審査ニ關シテハ學校職員恩給審査規程第二章ノ規定ニ依ル

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料取扱規程

明治四十二年二月十五日
內務省令第四號

樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料取扱規程左ノ通之ヲ定ム

第一條　樺太廳立小學校教員退隱料、退職給與金、扶助料及ヒ扶助金ノ取扱ニ關シテハ本令ニ定ムルモノヲ除クノ外市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則第一條乃至第十五條、內閣恩給局長管掌ニ屬スル巡査看守退隱料及遺族扶助料取扱規程第十三條、第十八條乃至第二十一條及官吏恩給法施行規則第九條ノ規程ニ依ル

第二條　樺太廳立小學校教員退隱料及遺族扶助料ニ關スル法律ニ依リ退隱料、退職給與金、扶助料又ハ扶助金ヲ受クヘキ者ハ樺太廳長官ニ請求スヘシ

第三條　市町村立小學校教員退隱料及遺族扶助料支給規則中府縣知事ニ屬スル事項ハ樺太廳長官之ヲ行フ

第四條　內閣恩給局長管掌ニ屬スル巡査看守退隱料及遺族扶助料取扱規程中內閣恩給局長ニ屬スル事項ハ樺太廳長官內閣恩給局ニ屬スル事項ハ樺太廳之ヲ行フ

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者犯罪若ハ就職ノ場合ニ於ケル通知方

明治四十二年二月十五日 内務省令第五號

明治四十一年法律第三十五號ニ依リ退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者犯罪若ハ就職ノ場合ニ於ケル通知方左ノ通之ヲ定ム

第一條　退隱料又ハ扶助料ヲ受クル者禁錮以上ノ刑ニ處セラレタルトキハ其ノ確定裁判ノ宣告ヲ爲シタル裁判所ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ

第二條　退隱料ヲ受クル者公務ニ就キタルトキハ其ノ所屬主長ヨリ之ヲ大藏省ニ通知スヘシ爾後其ノ給料額ニ異動アルトキ及解職シタルトキ亦同シ

前項ノ通知書ニハ退隱料ノ支給ヲ受ケタル地方廳名、證書番號、給料額及其ノ支給ヲ始ムル日、給料額ニ異動アルトキハ支給ヲ增減スヘキ始日又解職ノトキハ支給ヲ終リタル日ヲ付記スヘシ

第三條　大藏省ニ於テ前二條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ樺太廳及支給廳ニ通知スヘシ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○文官判任官以上ノ者退官賜金ノ件

明治二十三年六月二十日 勅令第九十八號（改正二六年勅二〇號）

朕茲ニ文官判任官以上ノ者退官賜金ノ件ヲ裁可ス

文官判任以上ノ者在官滿一年以上ニシテ退官シタル者ニハ退官現時ノ俸給半箇月分ヲ以テ在官年數ノ一箇年ニ當テ其年數ニ應スル金額ヲ一時支給ス但非職滿期ニ由リ退官シタル者ハ其在職最終ノ俸給額ニ依リ之ヲ給ス（二六年勅二〇號）

本令施行前ニ滿年賜金若クハ一時賜金ヲ受ケタル者又ハ前項ノ賜金ヲ受ケタル者再ト任官シ自後退官シタルトキハ前項ニ掲クル在官年數ヲ其再任ノ日ヨリ起算ス

恩給ヲ受クル者並自己ノ便宜ニ由リ退官シタル者又ハ懲戒處分若クハ刑事裁判ニ由リ免官シタル者ニハ本令ノ賜金ヲ給セス

本令ハ明治二十三年七月一日ヨリ施行ス

○官吏療治料給與ノ件

明治二十五年九月二十六日 勅令第八十號

朕官吏療治料給與ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官吏ニシテ職務ノ爲メ傷痍ヲ受ケタル者ハ特別ノ規定アルモノヲ除ク外療治料實費ヲ以テ給與ス

但府縣ノ收入ヨリ給料ヲ受クル者ノ療治料ハ其府縣ノ負擔トス

○官吏傳染病豫防救治ニ從事シ感染又ハ死亡シタルトキ手當金給與方

明治十九年七月十三日閣令第二十三號（改正三三年勅一四二號）

各官廳

官吏公務ニ依リ傳染病豫防救治ニ從事シ爲メニ感染シ又ハ死亡シタルトキハ左ノ區別ニ從ヒ手當金ヲ給ス（三三年勅一四二號）

一　手當金ヲ分チ弔祭料、救助料、療治料ノ三種トス

一　救助料ハ感染者又ハ死亡シタル者ノ遺族ニ之ヲ給ス

一　療治料ハ感染者治療看護ノ雜費トシテ之ヲ給ス

一　弔祭料ハ年俸十二分ノ一若クハ月俸一箇月分若クハ日給三十日分ヲ給ス但官ヨリ埋葬スル者ハ之ヲ給セス

一　救助料ヲ分テ二等トス

一等　俸給五箇月分日給百五十日分

二等　俸給三箇月分日給九十日分

一　感染者死亡シタルトキハ一等救助料ヲ給シ死亡セサルトキハ二等救助料ヲ給ス

一　療治料ハ高等官ニハ一日三圓判任官ニハ一日二圓ヲ給ス（三三年勅一四二號）

○傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ手當金ニ關スル法

明治三十三年三月六日法律第三十號

朕帝國議會ノ協贊ヲ經タル傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ手當金ニ關スル法律ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

第一條　判任以上ノ官吏ニ非スシテ傳染病ノ豫防救治ニ從事スル者公務ニ因リ病毒ニ感染シ又ハ之ニ原因シテ死亡シタルトキハ本法ノ規定ニ依リ手當金ヲ給ス

第二條　手當金ハ左ノ四種トス

一　療治料

二　給助料

三　弔祭料

四　遺族扶助料

第三條　病毒ニ感染シタル者ニハ療治料ヲ給ス感染者治癒シタルトキハ給助料ヲ給シ死亡シタルトキハ其ノ遺族ニ弔祭料及遺族扶助料ヲ給ス遺族ナキトキハ葬儀ヲ行フ者ニ弔祭料ヲ給ス

第四條　遺族扶助料ハ死者ノ受ケタル給料ノ金額ニ應シ別表ニ依リ一時之ヲ給ス其ノ給料ヲ受ケサル者ニ在リテハ別表ノ範圍内ニ於テ本屬長官適宜之ヲ給ス

第五條　療治料ハ命令ノ定ムル區別ニ依リ一日三圓以内ヲ給ス

給助料ハ遺族扶助料ノ二分ノ一ニ相當スル金額ヲ給ス

弔祭料ハ月給一箇月分又ハ日給三十日分ニ相當スル金額ヲ給ス其ノ給料ヲ受ケサル者ニ在リテハ本屬長官適宜之ヲ給ス

第六條　手當金ハ國庫支辨ノ事務ニ從事スル者ニ在リテハ國庫ノ負擔トシ府縣費支辨ノ事務ニ從事スル者ニ在リテハ府縣ノ負擔トス

第七條　地方長官ハ市區町村ニ指示シ本法ノ規定ニ準シ其ノ傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ手當金支給ニ關スル規定ヲ設ケシムルコトヲ得

（別表）

等級	月給	遺族扶助料
一等	二百圓以上	千圓
二等	百六十圓以上	九百圓
三等	百三十圓以上	八百圓
四等	百圓以上	七百圓
五等	八十圓以上	六百圓
六等	七十圓以上	五百圓
七等	六十圓以上	四百五十圓
八等	五十圓以上	四百圓
九等	四十圓以上	三百五十圓
十等	三十圓以上	三百圓
十一等	二十圓以上	二百五十圓
十二等	十圓以上	二百圓
十三等	十圓未滿	百圓

○傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ療治料ニ關スル件

明治三十三年四月十日
勅令第百四十一號

朕傳染病豫防救治ニ從事スル者ノ療治料ニ關スル件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

明治三十三年法律第三十號第五條ノ療治料ハ給料ヲ受クル者ニ在リテハ其ノ給料額ニ依リ同法別表ノ等級ニ照シ一等乃至四等ノ者ニハ一日二圓十三等ノ者ニハ一日一圓ヲ給ス其ノ給料ヲ受ケサル者ニ在リテハ一日三圓以內ニ於テ本屬長官適宜之ヲ給ス

○巡査看守療治料、給助料及弔祭料給與令

明治三十四年七月二十五日
勅令第百四十九號
（改正三八年勅三九號）

朕巡査看守療治料、給助料及弔祭料給與令ヲ裁可シ玆ニ之ヲ公布セシム

巡査看守療治料、給助料及弔祭料給與令

第一條　巡査又ハ看守職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ本屬長官ニ於テ治療ヲ要スルモノト認ムルトキハ其ノ治療中療治料ヲ給ス

療治料ハ一日二圓以内トス但シ治療費一日平均二圓ヲ超過シタルトキハ適當ト認ムヘキ實費ヲ精算シテ之ヲ追給スルコトアルヘシ

第二條　療治料ヲ受クル者左ノ各號ノ一ニ當ルトキハ給助料ヲ給ス

一　治療二十日以上ニ渉リ引續在職シ治療ヲ要セサルニ至リタルトキ

二　療治料給與ニ係ル傷痍疾病ニ因リ職ニ堪ヘス退職シ治療ヲ要セサルニ至リタルトキ

前項ノ給助料ハ第一號ニ當ル者ニ在リテハ治療ヲ要セサルニ至リタル當時ノ月俸一箇月分トシ第二號ニ當ル者ニ在リテハ退職當時ノ月俸三箇月分トス

療治料ヲ受クル者治療二十日以上ニ渉ラスト雖引續在職シ本屬長官必要ト認ムルトキハ治療ヲ要セサルニ至リタル當時ノ月俸一箇月分以内ノ範圍ニ於テ給助料ヲ給スルコトアルヘシ但シ治療七日ニ滿タサルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三條　巡査又ハ看守在職中死亡シタルトキハ左ノ順位ニ從ヒ其ノ家ニ在ル親族ニ弔祭料ヲ給ス但シ同順位間ニ在リテハ其ノ親等ノ最モ近キ者ヲ先ニシ同親等間ニ在リテハ男ハ女ニ先チ同性間ニ在リテハ長ハ幼ニ先ツ

一　配偶者
二　直系卑屬
三　直系尊屬
四　兄弟姉妹

前項親族ニシテ公權剝奪若ハ停止中ニ係リ又ハ行方不明ナルトキハ弔祭料ヲ給スル限ニ在ラス但シ次位者アルトキハ之ヲ轉給ス

弔祭料ハ死亡當時ニ於ケル月俸一箇月分トシ勤續一年以上九年ニ至ル迄一年ヲ加フル毎ニ死亡當時ニ於ケル月俸額三分二ヲ增加ス但シ職務ノ爲傷痍ヲ受ケ又ハ職務ニ依リ健康ニ有害ナル感動ヲ受クルヲ顧ミルコト能ハスシテ勤務ニ從事シ爲ニ疾病ニ罹リ因テ死亡シタル者ニハ更ニ死亡當時ニ於ケル月俸六箇月分ヲ增加ス

勤續年數ノ計算ニ關シテハ巡査看守退隱料及遺族扶助料法ノ例ニ依ル

第四條　前條ニ依リ弔祭料ヲ受クヘキ者ナキトキハ死亡者ノ爲葬祭ヲ行フヘキ者ニ前條ニ定ムル金額ノ三分一以内ヲ給スルコトアルヘシ

第五條　休職者ハ在職者ニ準シ休職ヲ命セラレタル當時ノ月俸額ニ依リ本令ニ依ル給與ヲ行フ

第六條　本令ニ依ル給與ハ之ヲ行フヘキ事由ノ生シタル當時ニ於テ俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔トス但シ休職者ニ在リテハ休職ヲ命セラレタル際俸給ヲ受ケタル經濟ノ負擔トス

第七條　本令ハ陸軍監獄看守、海軍監獄看守、陸軍警守、海軍警査、貴族院守衛、衆議院守衛及女監取締ニ之ヲ適用ス（三八年勅三九號附則參觀）

附則

本令ハ明治三十四年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

○官役職工人夫扶助令

明治四十年五月九日勅令第百八十六號

朕官役職工人夫扶助令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

官役職工人夫扶助令

第一條　政府ニ於テ使役スル職工、人夫其ノ他ノ傭人自己ノ重大ナル過失ニ因ルニ非スシテ業務上傷痍ヲ受ケ、疾病ニ罹リ又ハ死亡シタルトキハ特別ノ規定アルモノヲ除クノ外本令ニ依リ扶助金ヲ給ス

第二條　扶助金ヲ分テ左ノ五種トス

一　療治料
二　給助料
三　不具癈疾者扶助料
四　遺族扶助料
五　葬祭料

第三條　療治料ハ傷痍ヲ受ケ又ハ疾病ニ罹リ治療ヲ要スル者、給助料ハ療養ノ爲休業中ノ者又ハ治療數月ヲ要スル見込ヲ以テ退業シタル者ニ之ヲ給ス

不具癈疾者扶助料ハ終身自用ヲ辨スルコト能ハサル者、終身業務ヲ營ムコト能ハサル者其ノ他ノ不具癈疾者ニ之ヲ給ス

葬祭料及遺族扶助料ハ死亡ノトキ死者ト同一ノ家ニ在リタル遺族ニ之ヲ給ス

死者ニシテ前項ノ遺族ナキトキハ葬儀ヲ行フ者ニ葬祭料ヲ給スルコトヲ得

第四條　遺族中葬祭料及遺族扶助料ヲ受クヘキ者ハ左ノ順位ニ依ル

配偶者　子　父母　孫　祖父母　兄弟　姉妹

前項同順位内ニ於テハ男ハ女ニ、長ハ幼ニ先ツ但シ家督相續人ハ最先トス

第五條　不具癈疾者扶助料ヲ受ケ又ハ治療數月ヲ要スル見込ヲ以テ退業シタルトキハ療治料、葬祭料及遺族扶助料ヲ給セス

第六條　扶助金ノ額ハ別表ニ依ル

附　則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

官役人夫死傷手當規則ハ之ヲ廢止ス

（別表）

			賞	額
療治料		療養ノ爲休業中ノ者	日給	三分ノ一以上二分ノ一以下
給助料		治療數月ヲ要スル見込ヲ以テ退業シタル者	日給	三十日分以上五十日分以下
		終身自用ヲ辨スルコト能ハサル者	日給	百二十日分以上百七十日分以下
不具癈疾者扶助料		終身業務ヲ營ムコト能ハサル者	日給	六十日分以上百四十日分以下
		其ノ他ノ不具癈疾者	日給	四十日分以上百日分以下

葬祭料

遺族扶助料

日給	十四以上十五四以下
八十日分以上百五十日分以下	

一不具廢疾者扶助料又ハ遺族扶助料ノ金額三十圓ニ充タサルトキハ三十圓ヲ給ス

一稼高ニ依リ賃錢ヲ受クル者ニ在リテハ前三十日間ノ就業平均額ニ依リ其ノ給額ヲ定ム但シ平均額ヲ算出スルコト能ハサルトキハ適宜之ヲ定ム

六 禮式、服制、徽章

○警察禮式 明治二十四年八月十日内務省訓令第十五號（改正一三三年訓一三號）

廳府縣（鐵道廳ヲ除ク）

警察禮式左ノ通リ相定ム

但明治十九年當省訓令第十九號ハ自今廢止ス

警察禮式

第一條　警察官吏ニシテ定制ノ服裝ヲ爲シタルトキハ本式ニ依リ禮式ヲ行フモノトス

第二條　本禮式中上官ト稱スルハ巡査ノ巡査部長以上、巡査部長ノ警部以上、警部ノ警視【警部長】以上、警視【警部長】ノ警視總監北海道長官府縣知事ニ於ケルヲ云フ但課署員ノ其課署長ニ於ケル亦同シ（一三三年訓一三號）

第三條　禮式ハ定制ノ服裝ヲナセシ人ニ行フヲ正例トス然レトモ單獨ノ禮式ハ服裝ノ如何ニ拘ハラス上官タルコトヲ認知シタルトキハ成可ク之ヲ行フヘシ

第四條　職務執行ノ爲メ止ムヲ得サル場合ノ外上官ニ對シテハ必ス禮式ヲ行ヒ上官ハ之ニ答禮シ同班ハ互ニ禮式ヲ行フヘシ但答禮ハ時宜ニヨリ略スルモ妨ナシ

第五條　禮式ヲ別テ室内ノ最敬禮敬禮、室外ノ最敬禮敬禮トス室内トハ居室事務室應接所等ニシテ廊下階段廚等ノ如キハ室外トス

第六條　室内ノ最敬禮ハ正面ノ方向ヲ取リ直立シ兩足ヲ整ヘ右手ニ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ帽

ノ内部ヲ右股ニ對セシメ刀ノ柄ヲ前ニシ左手ヲ以テ兩鐶ノ間ヲ押ヘ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾クヘシ
但シ佩刀セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ（同上）

第七條　室内ノ敬禮ハ敬スヘキ人ニ對シ正面シ姿勢ヲ正シ其眼ニ注目シ右手ニ帽ノ前庇ヲ摘ミ之ヲ垂直ニ提ケ刀ノ柄ヲ前ニシ左手ヲ以テ兩鐶ノ間ヲ押ユヘシ但佩刀セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ（同上）

第八條　室外ノ最敬禮ハ正面ノ方向ヲ取リ直立シ兩足ヲ整ヘ右手ヲ擧ケ諸指ヲ接シテ食指ト中指ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ掌ヲ稍〻外面ニ向ケ肘ヲ肩ニ齊シクシ刀ノ柄ヲ前ニシ左手ヲ以テ兩鐶ノ間ヲ押ヘ敬スヘキ人ヲ目迎シ五六歩過キ去ルマテ目送スヘシ但シ佩刀セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ（同上）

第九條　室外ノ敬禮ハ敬スヘキ人ニ對シ姿勢ヲ正シ右手ヲ擧ケ諸指ヲ接シテ食指ト中指ヲ帽ノ前庇ノ右側ニ當テ刀ノ柄ヲ前ニシ左手ヲ以テ兩鐶ノ間ヲ押ユヘシ但シ佩刀セサルトキハ左手ヲ垂下スヘシ（同上）

第十條　天皇　三后　皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃皇族ニ對シテハ最敬禮ヲ行フヘシ
外國ノ皇帝皇后及ヒ皇族ニ於ケルモ亦前項ニ同シ

第十一條　内閣總理大臣各省大臣正式勅使及ヒ上官ニ對シテハ敬禮ヲ行フヘシ
各國公使タルコトヲ認知シタルトキハ亦前項ニ同シ

第十二條　儀式祭典等ノ爲メ其場所ニ整列セルトキハ
天皇　三后　皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃皇族ニ對シ又ハ其儀式祭典ニ就キ禮式ヲ行フノ外總テ敬禮セサルモノトス

第十三條（三三年勅三號）　整列シタルトキハ「氣ヲ付ケ」ノ令ニテ一同受禮者ニ注目シ其指揮ヲ掌ル者ノミ相當ノ禮式ヲ行フヘシ
隊伍ヲ爲シテ行進スルトキハ「頭右（左）」ノ令ニテ列員ノ頭首ヲ少シク受禮者ノ方ニ向ケ其指揮ヲ掌ル者ノミ相當ノ禮式ヲ行フヘシ
但シ行進中ハ最敬禮ヲ行フ場合ノ外停止スルニ及ハス

第十四條　警衛、消防、囚徒護送其他特別ノ注意ヲ要スル職務ニ從事中ハ禮式ヲ行フ限リニアラス

第十五條　物品ヲ携帶シ相當ノ禮ヲ行フ能ハサルトキハ體ノ上部ヲ少シク前ニ傾ケ若シ一手ニ携帶スルトキハ右手ヲ帽ニ當ツヘシ但シ巡査歩行中ナルトキハ停立シテ敬禮ノ意ヲ表スヘシ

第十六條　職務上人民ヨリ正當ニ禮ヲ受ケタルトキハ之ニ答禮スヘキモノトス

第十七條　敬禮ハ階級ノ異ナル人二人以上ニ對シテハ其最高級ノ人ニ對向シ行フモノトス
前項ノ場合ニ於テハ上官皆答禮ヲ行フヘシ

第十八條　官署室内ニ入ルトキハ帽ヲ脱スヘシ但下班ノ者ノ室内ニハ脱帽セサルモ妨ケナシ

第十九條　兩陛下ニ拜謁スルトキハ　御室ニ入リ一タヒ最敬禮シ更ニ　玉座ヲ離ルヽコト凡ソ五六歩ノ所ニ進ミ二タヒ最敬禮ヲ行ヒ其儘二三歩退歩シ右回轉ヲナシ御室ノ出口ニ於テ三タヒ最敬禮シ然ル後退去ス可シ但特ニ式アルトキハ此限ニアラス
太皇太后　皇太后　皇太子皇太子妃皇太孫皇太孫妃皇族竝ニ外國皇帝皇后皇族ニ謁見スルトキ又前項ニ同シ

第二十條　上官ノ室内ニ入ラントスルトキハ其入口ニ直立シ來意ヲ告ケ指揮ヲ待ツヘシ上官入室ヲ許ストキハ其席ヲ離ルヽコト凡三四歩ノ所ニ於テ敬禮スヘシ若シ數名アルトキハ先ツ其最高級ノ人ニ

敬禮シ次ニ他ノ一同ニ敬禮スヘキモノトス其居室ヲ去ルトキ亦同シ

第二十一條　官記位記勳記辭令書ノ類ヲ受クルトキハ授與者ノ席ヲ離ルヽコト凡三四歩ノ所ニ於テ敬禮ヲ行フノ後適宜ニ前進シ帽ヲ左脇ニ挾ミ右手ヲ以テ拜受シ左手ヲ剄テ披見シ直ニ之ヲ收メ舊位ニ復シテ再ヒ敬禮ヲ行ヒ退去スヘシ

第二十二條　室内ニ於テ上官ヨリ書類其他ノ物件ヲ受ケ或ハ之ヲ上官ニ呈スルトキハ前條ノ法ニ準シ右手ヲ以テ之ヲ受ケ或ハ之ヲ呈スヘシ若シ返簡又ハ領收等ヲ受クヘキトキハ舊位ニ復シテ之ヲ待ツヘシ

上官ヨリ命令諭告等ヲ承ケ或ハ事ヲ上官ニ陳述スルトキ亦前項ニ同シ

第二十三條　上官居室ニ來ルトキハ一同椅子ヲ離レテ敬禮スヘシ而シテ其關係アル者ノ外ハ一旦敬禮ノ後著席シテ各其事ニ服シ上官居室ヲ去ルトキ復タ敬禮ヲ行フヘシ

前項ノ敬禮ハ上官ノ先導者ニ於テ「氣ヲ付ケ」ノ注意ヲ加フヘシ若シ先導者ナキ場合ハ上官ノ入來ルコトヲ最初ニ知リタル者ニ於テ注意ヲ加フヘキモノトス（三三年訓一三號）

會議室教場其他場内ノ整理ニ任スル者アル室内ニ於テハ前項ノ注意ハ其整理ニ任スル者之ヲ爲スヘシ（同上）

第二十四條　同班又ハ下班ノ者居室ニ來リ敬禮ヲ行フトキハ同班ナレハ椅子ヲ離レテ敬禮シ下班ナレハ其儘答禮スヘシ

第二十五條　室内ニ於テ公事ヲ談スルトキ下班ノ者ハ椅子ヲ離レ立テ姿勢ヲ正スヘシ但上官許可スレハ著席スルモ妨ケナシ

第二十六條　上官ノ者下班ノ者ノ居室ニ入ルトキ著帽ノ儘ナレハ答禮ハ擧手注目シ脫帽ナレハ只之ニ注目シ答禮ノ意ヲ表スヘシ

第二十七條　宴會集會等總テ公會ニ於テ上官ト同席スルトキハ之ニ注意ヲ加ヘ先ニ椅子ニ倚ルコトナク先ニ食卓ニ就クコトナク先ニ食卓ヲ離ルコトナク先ニ喫烟スルコトナキヲ禮トス但シ上官ノ許可アルトキハ此ノ限リニアラス

第二十八條　行幸　行啓ニ遇フトキハ前驅ノ稍前ヨリ道路ノ一側ニ停止正面シ車駕五六歩前ニ近クトキ最敬禮ヲ行ヒ五六歩過キ去ル迄其姿勢ヲ保ツヘシ皇族及外國ノ皇帝皇后皇族ニ於ケル亦同シ

前項ノ場合ニ於テ馬上ニアルトキハ其儘馬ヲ駐メ正面シ道路狹隘ニシテ之ヲ爲シ得ヘカラサルトキハ轡ヲ縮メテ馬首ヲ擧ケ乘車ナルトキハ下車スヘシ

第二十九條　上官ニ行過ヒ又ハ其傍ヲ通過スルトキハ頭ヲ少シク受禮者ノ方ニ向ケ姿勢ヲ正シ敬禮ス可シ但巡査ハ上官ヲ距ル三四歩前ニ停止シ敬禮スヘキ人ニ面シ本文ノ敬禮ヲ爲スヘシ（同上）

第三十條　駐立ノ際上官其傍ヲ通過スルトキハ上官ノ方ニ正面シ敬禮ヲ行フヘシ其駐立シアル上官ノ許ニ至ルトキハ上官ヲ離ルヽコト凡三四歩ノ所ニ止リ敬禮ヲ行フヘキモノトス

第三十一條　乘馬ニテ馳歩若クハ速歩ヲ以テ行進中上官ニ遇フトキハ先ツ常歩ニ移シ敬禮ヲ行フヘシ若シ後方ヨリ來リテ先ニ行カントスルトキハ其旨ヲ陳ヘ然ル後馳歩若クハ速歩ニ復スヘシ但至急ノ公務ヲ帶ヒタルトキハ其由ヲ告ケ常歩ニ移ササルモ妨ケナシ

第三十二條　乘車ニテ上官ニ遇フトキハ乘車ノ儘姿勢ヲ正シ敬禮ヲ行フモ妨ケナシト雖モ後方ヨリ來リテ先ニ行カント欲スルトキハ其旨ヲ陳ヘ然ル後通過スヘシ

第三十三條　室外ニ於テ上官ヨリ書類其他物件ヲ受ケ或ハ之ヲ上官ニ呈セントスルトキハ第三十條後段ノ法ニ依リ敬禮ヲ行フノ後適宜ニ前進シ右手ヲ以テ之ヲ受ケ或ハ呈スヘシ若シ受クル所ノ物其場

ニ於テ披見スルヲ要スレハ左手ヲ副テ披見スヘシ返簡又ハ領證ヲ受クヘキトキハ舊位ニ復シテ之ヲ待ツヘシ

上官ヨリ命令諭告等ヲ承ケ或ハ事ヲ上官ニ陳述セントスルトキ亦前項ニ同シ

第三十四條　警察官吏ノ葬式ニ行過フトキハ其柩ニ對シ敬禮ヲ行フヘシ

第三十五條　上官ト同行スルトキハ其左側或ハ後方ニ就クヲ禮トスレトモ爲メニ上官ニ不便ヲ與ヘ若クハ危險ノ恐レアルトキハ宜キニ應シ右側ニ就クモ妨ケナシ但シ誘導者ハ左側若クハ後方ニ就クノ限リニアラス

第三十六條　狹隘ノ道路橋梁又ハ廊下階子段等ニ於テ上官ニ出會シタルトキハ立止リテ其通過ヲ待ツヘシ若シ既ニ進行中ナルトキハ便宜立戻リ上官ヲシテ己レノ通過ヲ待タシメサルヲ禮トス

第三十七條　警視廳消防官吏ハ本式ニ依リ各身分相當ノ禮式ヲ行フヘシ

○水上警察禮式

明治三十三年五月二十三日
內務省訓令第十四號

廳府縣（東京府ヲ除ク）

水上警察禮式左ノ通之ヲ定ム

水上警察禮式

第一條　水上警察ノ船舶ニ於テ警察禮式ニ依リ最敬禮又ハ敬禮ヲ要スル人ヲ望見シ又ハ其ノ乘船ニ行逢ヒ若ハ之ヲ送迎スルトキハ本式ニ依リ禮式ヲ行フヘシ

第二條　最敬禮ハ端舟ニ在テハ橈手一齊ニ橈ヲ立テ小蒸汽船ニ在テハ進行ヲ止メ船員ハ甲板上適宜ノ場所ニ整列シ帆走中ノ船ハ總帆ヲ下シ、櫓舟ハ進行ヲ止メ總員起立シテ禮式ヲ行フヘシ但シ一人ニシテ二挺ノ橈ヲ操ルトキハ橈ヲ收メ他方ノ橈ヲ立テ起立シテ禮式ヲ行フモノトス

第三條　敬禮ハ端舟ニ在テハ橈手橈ヲ上ケ、小蒸汽船ニ在テハ進行ヲ緩メ帆走中ノ船ハ「シート」ヲ伸ハシ櫓舟ハ進行ヲ止メ凡テ指揮者ノミ起立シテ禮式ヲ行フヘシ但シ一人ニシテ二挺ノ橈ヲ操ルトキハ禮ヲ受クル人ニ面セサル方ノ橈ヲ收メ他方ノ橈ヲ上ケ禮式ヲ行フモノトス

第四條　水上警察禮式ハ特ニ命令アリタル場合ノ外夜間ハ之ヲ行ハサルコトヲ得

第五條　至急ノ用務ヲ帶ヒタルトキ又ハ風雨ノ際其ノ他禮式ヲ行フコト能ハサルノ狀況ニ在ルトキ竝ニ荷物ヲ積載シタル船又ハ他船ニ曳カレタル船ニ乘込メルトキニ於テ禮式ヲ行ヒ得サル者ハ之ヲ略スルコトヲ得舵手機關手水火夫等ニシテ執務上ノ妨ケト爲ル場合モ亦同シ

第六條　上官ノ乘組ミタル船ヲ乘越エ又ハ其ノ前ヲ横過スルノ必要アルトキハ相當ノ禮式ヲ行ヒ通過スヘシ

第七條　同僚ノ乘組ミタル船行逢フトキハ指揮者ノミ互ニ禮式ヲ行フヘシ

第八條　船舶ニ出入ノ際ハ上官ヲ先ニスヘシ但シ端舟小蒸汽船ニ乘込ム場合ニ限リ下官ヨリ先ニスヘシ

第九條　機關手水火夫ハ帽ヲ脫シ相當ノ禮ヲ行フヘシ

第十條　端舟ニ在テ最敬禮ヲ行フトキハ其ノ指揮者ハ左ノ號令ヲ用フヘシ但シ「クラッチ」ヲ具備シタル端舟ニ在テハ第十一條ノ號令ヲ用フルモノトス

一　橈立テ方用意
二　立テ（橈ノ平面ヲ左右ニ向ケ兩手ヲ以テ之ヲ把持ス）
三　下セー
一人ニシテ二挺ノ橈ヲ操ルトキハ前項第一ノ號令ノ前ニ左ノ號令ヲ加フヘシ第十一條ノ場合ニ於テモ亦同シ
左（右）舷收メー（礮ヲ受クル人ニ面セサル方ヲ收メシムルモノトス）
第十一條　端舟ニ在テ敬禮ヲ行フトキハ其ノ指揮者ハ左ノ號令ヲ用フヘシ
一　橈上ケ方用意
二　上ケー（橈ヲ舷ト平線ニ保ツモノトス）
三　下セー
第十二條　帆走中ノ船ニ在テ最敬禮ヲ行フトキハ左ノ號令ヲ用フヘシ
一　帆下シ方用意
二　下セー
三　上ケー
第十三條　帆走中ノ船ニ在テ敬禮ヲ行フトキハ左ノ號令ヲ用フヘシ
一　「シート」伸シ方用意
二　放セー
三　元ヘー
第十四條　號令ハ端舟ニ在テハ舵ヲ掌ル者其ノ他ニ在テハ指揮者之ヲ爲スヘシ

第十五條　本式ニ規定セサル事項ハ總テ警察禮式ノ規定ニ依ル

○港務部及臨時海港檢疫所職員竝船舶ニ警察禮式水上警察禮式準用

明治三十五年五月六日内務省訓令第十二號

神奈川縣　兵庫縣　長崎縣　福岡縣
臨時海港檢疫所所在道廳府縣

明治二十四年當省訓令第十五號警察禮式ハ定制ノ服裝ヲ爲シタル港務部及臨時海港檢疫所職員ニ明治三十三年當省訓令第十四號水上警察禮式ハ港務部及臨時海港檢疫所船舶ニ之ヲ準用ス
但明治三十三年當省訓令第十一號ハ之ヲ廢止ス

○神官神職服制

明治二十七年一月三十一日勅令第六號（改正三三年勅令三七九號）

朕神官神職服制ノ件ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

神官神職服制

第一條　神官神職服制ハ別表ノ通定ム
第二條　神官神職ノ制服ハ正服略服及齋服トス
第三條　正服ハ大禮ノ場合ニ著用スルモノトス

大禮トハ天皇三后皇太子皇太孫御參拜、勅使奉幣、大祭、朝拜、參賀及謁見ヲ云フ

第四條　略服ハ小禮ノ場合ニ著用スルモノトス

小禮トハ毎月恒例小祭、日拜等ヲ云フ

第五條　齋服ハ公式ノ祭祀ニ著用スルモノトス但朝拜、參賀及謁見ヲ除クノ外時宜ニ依リ正服ニ換用スルコトヲ得

附　則

第六條　本令ハ明治二十七年四月一日ヨリ施行ス

（別表略）（三三年勅三七九號）

○警察官及消防官服制

明治四十一年二月四日（改正四二年勅一四七號）勅令第七號

（本文略）

○警察官及消防官服裝規則

明治二十三年七月二十九日（改正二七年訓八號四一年訓一號）内務省訓令第二十七號

廳府縣（東京府ヲ除ク）

警察官及消防官服裝規則左ノ通之ヲ定ム

警察官及消防官服裝規則

第一條　警察官及消防官ノ服裝ヲ分テ正裝禮裝常裝ノ三種トス

第二條（四一年訓一號）　正裝トハ正帽、衣、袴、正肩章、刀、正緒、手套、下襟及短靴ヲ著裝スルヲ云フ

第三條（同上）　禮裝トハ正帽、衣、袴、略肩章、刀、正緒、手套、下襟及短靴ヲ著裝スルヲ云フ

第四條（同上）　常裝トハ帽（正略帽）、衣、袴、略肩章、刀、常緒、手套、下襟及靴ヲ著裝スルヲ云フ

第五條（同上）　消防官ニ在テハ常裝ヲ著用スルトキニ限リ短刀ヲ佩用スルコトヲ得

但シ消防機關士ハ便宜之ヲ脱スルモ妨ナシ

第六條　正裝ハ儀式祭典等總テ大禮ノトキ著用スルモノトス其場合概ネ左ノ如シ

一　新年參賀

一　三大節（新年宴會紀元節天長節）參賀

一　天機伺其他拜謁ノ爲メ參内スルトキ

一　靖國神社招魂社大祭參拜

一　國儀式及公式行幸啓御先驅竝供奉ノトキ

一　任官敍位敍勳

一　一般大禮服著用ノ場合

一　成規上明文アル場合

第七條　禮裝ハ概ネ左ニ列記スル場合ニ於テ著用スルモノトス

一　宮中ニ於テ御宴ニ陪スルトキ

一　通常行幸啓御先驅及供奉ノトキ

一　天覽ノ場所ニ臨ミ陪覽スルトキ

一　行幸啓ノ場所ヘ參集シ若ハ奉送奉迎スルトキ

一　正式勅使警備
一　政始出廳
一　歳暮參賀
一　任官敍位敍勳ノ御禮及之ニ齊シキ場合ニテ參內スルトキ
一　巡閲ヲ行ヒ及巡閲ヲ受クルトキ
一　夜會其他廉アル宴會ニ臨ムトキ
一　通常禮服及「フロックコート」著用ノ場合
一　自家親屬其他ノ賀儀葬祭

第八條　常裝ハ平常勤務ノ際著用スル所ノ服裝トス

第九條　已ムヲ得サル場合ニ於テハ國儀式竝公式行幸啓御先驅ニ參スルトキ任官敍位敍勳ノトキニ限リ禮裝ヲ著用スルコトヲ得

第十條　行幸啓ノ道筋警衛及監臨等ノ場合ニ於テハ常裝ニ正帽ヲ用フヘキモノトス但急遽ノ場合ニ於テ監臨ヲ要スルトキハ正帽ヲ用ヒサルモ妨ケナシ（二七年訓八號）

第十一條（四一年訓一號）　夏衣ハ炎暑ノ際（凡六月一日ヨリ九月末日迄ノ間以下同シ）常裝ニ限リ著用スルコトヲ得但シ夏衣ヲ著用スルトキハ夏袴ヲ著用スルモノトス

第十二條　夏袴ハ炎暑ノ際著用スルモノニシテ何レノ服裝ニ在テモ袴ニ代用スルコトヲ得

第十三條　甲種外套ハ何レノ服裝ヲ論セス雨雪ノ際又ハ防寒ノ爲メ室外ニ於テ著用スルモノトス尤防寒ノ爲メ特ニ室內ニ於テ著用スルコトヲ得但儀式祭典ノ場所及上官ノ居室內ニ在テハ此限ニ在ラス

第十四條　乙種外套ハ雨雪ノ際甲種外套ノ上ニ著用スルモノトス尤時宜ニ依リ乙種外套ノミヲ著用スルモ妨ケナシ

第十五條　覆面ハ雨雪ノ際甲種又ハ乙種ノ外套ニ附屬シテ用フルモノトス

第十六條（同上）　日覆ハ炎暑ノ際略帽ニ限リ之ヲ用ウルモノトス

第十七條　頤紐ハ何レノ服裝ヲ論セス職務執行ノ場合ニ於テ必ラス之ヲ用フヘシ其他ノ場合ニ於テハ各自ノ便宜ニ依ル

第十八條　刀ハ室ノ內外ヲ問ハス上部ノ鐶ヲ刀帶ノ釣金ニ掛ケ乘馬ニ在テハ之ヲ掛ケサルヲ法トス

第十九條（四一年訓一號）　刀帶ハ衣ノ下ニ締ムルモノトス

第二十條　正緒ハ正裝禮裝ノトキ常緒ハ常裝ノトキ刀柄ニ裝著ス

第二十一條（同上）

第二十二條　手套ハ何レノ服裝ヲ論セス白色ノモノヲ用フヘシ

第二十三條　下襟ハ何レノ服裝ニ在テモ白布製ノ立襟ヲ用フヘシ

第二十四條　靴ハ長短ヲ問ハス黑色革製トシ袴下ニ穿ツヲ法トス但長靴ハ常裝ニ限リ袴上ニ穿ツモ妨ナシ

乘馬者ニ在テハ短靴長靴共ニ必ス拍車ヲ附著シ其短靴ヲ穿ツトキハ袴ニ留革「スーピエー」ヲ附著スヘシ

第二十五條　勳章其他ノ記章ハ何レノ服裝ニ在テモ之ヲ佩用ス其佩用方ハ明治二十一年十一月勅令第七十六號及明治二十二年二月七日賞勳局告示第一號ニ據ルヘシ

第二十六條　奉送奉迎御先驅式正勅使警備其他儀式上隊伍ヲ爲ス場合ニ於テハ各員齊一ノ服裝ヲ爲スヘシ

第二十七條　外套ヲ携帶スルニハ附屬品ヲ內ニ納メ適宜捲收シ乘馬者ニ在テハ後鞍ニ締結シ徒步者ニ

在テハ兩端ヲ結束シ左肩ヨリ斜ニ右腋下ニ掛クルモノトス

○巡査服制 明治四十一年二月四日 勅令第八號

（本文略）

○巡査服裝規則 明治二十九年十一月二十六日（改正三四年訓一九號 四一年訓二號） 內務省訓令第十一號

警視廳 府縣（東京府ヲ除ク）

巡査服裝規則左ノ通相定ム

巡査服裝規則

第一條（四一年訓二號） 巡査ノ服裝トハ帽、衣、袴、肩章、刀、刀緒、手套、下襟及靴ヲ著裝スルヲ云フ

第二條（同上） 服裝ハ正肩章ヲ著クルヲ正裝トシ略肩章ヲ著クルヲ常裝トス但シ正裝ノ場合ニ於テハ乘馬勤務ノ者ノ外短袴ヲ用ヰサルモノトス

夏期正裝ノ場合ニ於テハ衣ハ絨衣ヲ著クルモノトス但シ袴ハ夏袴ヲ用ウルモ妨ナシ

第三條 正裝ハ警察官及消防官服裝規則第六條、第七條ノ場合ニ於テ用ユル所ノ服裝トス

第四條 常裝ハ平常勤務ノ際用ユル所ノ服裝トス

第五條 夏衣、夏袴ハ炎暑ノ際（凡ソ六月一日ヨリ九月末日マテノ間以下同シ）用ユルコトヲ得

第六條 甲種外套ハ雨雪ノ際又ハ防寒ノ爲ニ用ユルモノトス但シ儀式祭典ノ場所及上官ノ室內ニ在テハ用ユルコトヲ得ス

第七條 乙種外套ハ雨雪ノ際甲種外套ノ上ニ用ユルモノトス但シ時宜ニ依リ乙種外套ノミヲ用ユルモ妨ナシ

第八條 覆面ハ雨雪ノ際甲種外套又ハ乙種外套ニ附著シテ用ユルモノトス

第九條（同上） 日覆ハ炎暑ノ際常裝ニ限リ之ヲ用ウルモノトス

第十條 頤紐ハ何レノ服裝ニ在テモ職務執行ノ場合ニ於テハ之ヲ用ユルモノトス

第十一條 手套及下襟ハ何レノ服裝ニ在テモ白色トシ且下襟ハ立襟ヲ用ユルモノトス但シ村落ニ於テハ常裝ノ場合ニ限リ下襟ヲ用ヒサルコトヲ得

第十二條 靴ハ長短ノ二種トシ黑色革製トス

長靴ハ雨雪泥濘ノトキ短靴ハ其他ノ場合ニ於テ用ユルモノトス但シ長途ノ旅行又ハ村落ニ於テ職務執行上特ニ必要ナル場合ニ於テハ短靴「ゲートル」（黑又ハ紺）又ハ鞋脚絆（黑又ハ紺）ヲ用ユルコトヲ得（三四年訓一九號）

第十三條 勳章其他ノ記章ハ何レノ服裝ニ在テモ之ヲ佩用スルコトヲ得

第十四條 儀式上隊伍ヲ爲ス場合ニ於テハ各自齊一ノ服裝ヲ爲スヘシ

第十五條 外套ヲ携帶スル者ハ附屬品ヲ內ニ納メ適宜捲收シ兩端ヲ結束シ左肩ヨリ斜ニ右腋下ニ掛クルモノトス

附則

第十六條 此ノ規則ハ明治二十九年勅令第三百六十八號巡査服制施行ノ日ヨリ施行ス

巡査ノ服裝ハ寒暑ノ度著シク相違セル地ヲ除キ一定ノ期間整一ニ冬衣夏袴ヲ用ヒシムルコトヲ得

明治三十二年七月一日
内務省訓令第十八號

廳府縣（東京府ヲ除ク）

炎暑ノ際ニ於テ警察巡閲ヲ行ヒ又ハ受クル者ノ服裝ハ常裝ヲ用ウルコトヲ得

明治四十二年七月二日
内務省訓令第七號

警視廳府縣（東京府ヲ除ク）

○港務部職員服制 明治四十二年三月十二日 勅令第二十一號

（本文及服制圖例畧）

○北海道廳森林監守服制 明治三十二年六月二十一日 勅令第二百九十四號（改正三八年勅令第二六七號）

（本文及服制圖例並服制圖略）

○北海道廳森林監守服裝帶劒並禮式規定 明治三十二年六月二十二日 内務省訓令第二十一號

北海道廳森林監守服裝帶劒並禮式ニ關スル規定ハ【明治二十四年七月農商務省訓令第三十號】ヲ準用スヘシ

北海道廳

○掃除監視吏員服制 明治三十三年三月三十一日 内務省訓令第三號

（本文及服制圖例略）

○府縣廳等門玄關ニ御紋ノ幕提灯ヲ用フ 明治三年十月十四日 太政官布告

府縣廳並ニ飛地出張所等門玄關自今御紋ノ幕挑燈相用可申事

○水上警察旗製式 明治三十二年七月二十五日 内務省訓令第二十七號

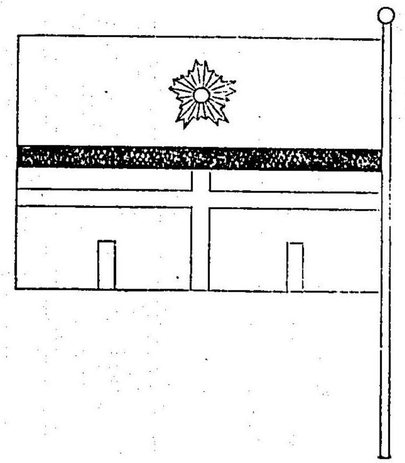
廳府縣（東京府ヲ除ク）

水上警察巡回用ノ汽船及短艇ニハ水上警察旗ヲ掲揚スヘシ

水上警察旗ノ製式左ノ如シ

港務部職員服制　北海道廳森林監守服制　北海道廳森林監守服裝帶劒並禮式規定
掃除監視吏員服制　府縣廳等門玄關ニ御紋ノ幕提灯ヲ用フ　水上警察旗制式
廳府縣臨時檢疫官記章

水上警察旗



○廳府縣臨時檢疫官記章 明治二十八年六月十三日 內務省訓令第十號

臨時檢疫部部長次長及檢疫官ハ左腕ニ檢ト朱書セル黃布ヲ纏ヒ記章トスヘシ

黃布ハ幅一寸質ハ絹トス

廳府縣

製式

一 地白

二 縱二尺五寸橫三尺五寸

三 日章ハ直徑七寸其日ハ白トシ光線ハ黑線ノ緣ヲ付シ赤トス

四 最上位ノ橫線ハ黑トシ其ノ他ノ線ヲ赤トス

五 日章ト黑線ノ間隔ハ一寸トス

六 線ノ幅及線ト線トノ間隔ハ二寸五分トス

七 縱短線ノ長サハ六寸トシ中央縱線トノ間隔ハ六寸五分トス

八 短艇用ノ警察旗ハ便宜縮少スルコトヲ得

七 官印

○官印製式 明治三十一年八月十二日 閣令第五號

明治八年太政官第十號達ヲ左ノ通改正ス

公務ニ關シ長官或ハ主任ノ名ヲ以テ上申下達及往復スル書類ニ用ヰル印章ハ勅任官ハ方九分曲尺奏任官ハ方七分曲尺判任官ハ方六分曲尺トシ官名ノミヲ彫刻スヘシ但シ現ニ使用ノ分ハ改刻スルニ及ハス

チキナX37

法規類抄上卷終

禁電子式複写

031118-008-7

CZ-5-016

法規類抄

内務省総務局

M23-43

BBC-0935